

ハンセン病に関する 「親と子のシンポジウム」 那覇会場

* 報告書 *



人KENあみちゃん



人権イメージキャラクター

人KENまもる君

◆ ◇ ◆ ◇ 目 次 ◇ ◆ ◇ ◆

本シンポジウムの目的	3
実施結果概要	4
プログラム	5
会場風景	6
主催者挨拶	8
第一部 シンポジウム	
基調講演	9
パネルディスカッション	14
第二部 映画上映	
映画「あん」	22
対談/トークショー	24
来場者アンケート集計	
中学生以上/大人用	31
小学生以下用	40
広報内容	
事前広報	41
実施内容の周知	43
関連資料等	
広報用チラシ	45
来場者向け配布資料	45
新聞採録	46
採録記事に関する反応（参考）	50
これまでの実績	75

平成29年度

ハンセン病に関する
「親と子のシンポジウム」
那覇会場

実施結果概要 及び 新聞採録等報告

本シンポジウムの目的

平成 15（2003）年 11 月に熊本県内の宿泊施設において、ハンセン病療養所の入所者が宿泊を拒否されるという事件が発生し、さらには、この事件の報道をきっかけにハンセン病療養所及び入所者に対して非難あるいは誹謗中傷する手紙等が多数送りつけられるなどの二次被害が発生しました。

このような差別や偏見の解消を更に推し進めるために、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が平成 20（2008）年 6 月に成立し、平成 21（2009）年に 6 月 22 日が「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」と定められています。さらに、平成 22（2010）年 12 月、国連総会において「ハンセン病差別撤廃決議」が採択されました。

ハンセン病に関する誤った知識や偏見等により、日常生活で差別が行われるようなことがあってはならず、ハンセン病患者等に対する偏見・差別の解消を目指すためには、人格が形成される小・中学生の時期にハンセン病を正しく理解することが不可欠です。そこで、「医学から見たハンセン病」、「歴史から学ぶハンセン病」、「ハンセン病患者・回復者の人権」等について、親子で共に考えていく「親と子のシンポジウム」を開催します。

◆ ◇ ◆ ◇ 実施結果概要 ◇ ◆ ◇ ◆

- 【事業名称】 ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」那覇会場
- 【日 時】 2017（平成29）年8月26日（土） 13:30～17:25（開場 12:30～）
- 【会 場】 沖縄県男女共同参画センターていりる・1F・ホール
（〒900-0036 沖縄県那覇市西3-11-1）
<http://www.tiruru.or.jp/>
- 【参加者数】 252名（事前申込制／先着順）
- 【対 象】 一般（国民全般）
- 【参加費】 無料
- 【主 催】 法務省／厚生労働省／全国人権擁護委員連合会／那覇地方法務局／
沖縄県人権擁護委員連合会／公益財団法人人権教育啓発推進センター
- 【後 援】 文部科学省／沖縄県／沖縄県教育委員会／那覇市／那覇市教育委員会／名護市／
名護市教育委員会／中城村／中城村教育委員会／沖縄県市長会／沖縄県町村会／
沖縄タイムス社／琉球新報社／朝日新聞那覇総局／読売新聞那覇支局／
毎日新聞社那覇支局／産経新聞社那覇支局／日本経済新聞社那覇支局／
共同通信社那覇支局／時事通信社那覇支局／NHK沖縄放送局／RBC琉球放送／
OTV沖縄テレビ放送／QAB琉球朝日放送／OCN沖縄ケーブルネットワーク／
エフエム沖縄／ラジオ沖縄 / f m那覇／FMレキオ／FMやんばる／おきなわ倶楽部／
（順不同）

動画共有サイトYouTube「人権チャンネル」
（<https://www.youtube.com/jinkenchannel>）に
本シンポジウム撮影動画を掲載

- 主催者挨拶～基調講演 <https://youtu.be/irE82gKErvU>
- パネルディスカッション <https://youtu.be/Oa0IRkYaxNU>
- 対談／トークショー <https://youtu.be/eNput9a-qhc>

◆ ◆ ◆ ◆ プ ロ グ ラ ム ◆ ◆ ◆ ◆

- 12:30～ — 受付開始 / 開場 —
- 13:30～12:35 ● 開会～法務大臣（主催者）挨拶（5分）
代読 名執 雅子（法務省人権擁護局長）
- 13:35～14:00 ● 基調講演（25分）
金城 雅春さん（国立療養所沖縄愛楽園自治会会長）
- 14:00～14:40 ● パネルディスカッション（40分）
○ パネリスト／地元中学生、高校生
・ 棚原 未央さん（中城村立中城中学校・2年）
・ 久志 顕介さん（名護市立久辺中学校・2年）
・ 渡久地 礼季さん（沖縄カトリック高等学校・2年）
○ コメンテーター：
・ 金城 雅春さん（国立療養所沖縄愛楽園自治会会長）
・ 野村 謙さん（国立療養所沖縄愛楽園園長）
○ コーディネーター：
・ 横田 洋三さん（法務省特別顧問、公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長）
- 14:40～14:50 — 休憩（10分） —
- 14:50～16:45 ● 映画「あん」上映（本編：1時間53分）
- 16:45～17:15 ● 対談／トークショー（30分）
○ ドリアン助川さん（作家、詩の道化師）※「あん」原作者
○ 浅田 美代子さん（女優）※映画「あん」出演
- 17:15～17:25 ● 閉会
- MC（司会・進行）
比嘉 光悠さん（名護市立久辺中学校・2年）
- 資料展示等
国立療養所沖縄愛楽園 紹介パネル

◆ ◆ ◆ ◆ 会場風景 ◆ ◆ ◆ ◆



受付の様子



人KENまもる君を囲んで



パネル等展示（ロビー）



展示パネルに見入る来場者



司会・進行：比嘉光悠さん（名護市立久辺中学校・2年）



主催者挨拶：名執雅子（法務省人権擁護局長）



基調講演の様子



金城 雅春さん（国立療養所中縄愛楽園自治会会長）



パネルディスカッションの様子



棚原未央（中城村立中城中学校2年）



久志顕介（名護市立久辺中学校2年）



渡久地礼李（沖縄カトリック高校2年）



野村謙（国立療養所沖縄愛楽園園長）



横田洋三（人権教育啓発推進センター理事長）



ドリアン助川（作家・詩の道化師）



浅田美代子（女優）

◆ ◆ ◆ ◆ 主 催 者 挨拶 ◆ ◆ ◆ ◆



本日は多数の皆さまに「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

ここ沖縄県には、昭和13（1938）年に設立された沖縄県立国頭愛楽園を前身とする沖縄愛楽園と、昭和6（1931）年に設立された沖縄県立宮古保養院を前身とする宮古南静園の2つの療養所があります。その沖縄県におきまして平成21（2009）年以來2回目となるシンポジウムが、このように開催されますことは、誠に意

義深いことと存じます。

ハンセン病問題に関しまして、国はこの問題の早期かつ全面的な解決を図るとの方針に基づき、国民の皆さまの理解を深め、ハンセン病患者、回復者の方々に対する偏見や差別をなくすために様々な啓発活動を全国で展開してまいりました。

私たちに必要なことは、誤った認識や偏見による悲劇が二度と繰り返されることのないよう、ハンセン病に対する正しい知識を身につけるとともに、ハンセン病患者、回復者の方々が進んでこられたこれまでの歴史や人権の尊さについて、しっかりと学ぶことです。とりわけ次世代を担う児童・生徒の皆さんにハンセン病を正しく理解いただくことが、とても大切なことだと考えております。

法務省といたしましても、ハンセン病患者・回復者の方々に対する偏見や差別をなくすことを啓発活動の強調事項の一つとして掲げ、平成17（2005）年度から毎年、各地においてシンポジウムを開催させていただいております。

本日お越しいただきました児童・生徒の皆さん、そのご家族の方々には、このシンポジウムを契機として、ハンセン病の問題について一緒に考えていただければ幸いです。そして、本日のシンポジウムを通じてハンセン病に関する理解がより一層深まり、一人ひとりの人権が尊重される成熟した社会の実現へとつながることを願っております。最後になりましたが、シンポジウムの開催にあたり、ご尽力いただきました多くの関係の皆さまに深く感謝の意を表しまして、ご挨拶とさせていただきます。

平成29（2017）年8月26日
法務大臣 上川 陽子

（代読：法務省人権擁護局長 名執 雅子）

◆ ◇ ◆ ◇ 第一部 シンポジウム ◇ ◆ ◇ ◆

[基調講演・レジュメ]

沖縄愛楽園の歴史に学ぶ

金城 雅春

国立療養所沖縄愛楽園自治会会長

1907（明治40）年 法律第11号癩予防に関する件

国は強制的に患者を社会から隔離する法律を定める。

これは患者を治療することを目的とする法律ではなかった。

江戸幕府の鎖国政策が終わり、外国人が自由に国内を往来する。

ことができるようになる中、ハンセン病患者が町中に存在することが

“国辱”であるとされた。

患者を隔離することが主たる目的

-
- 1909（明治42）年 全国5か所に療養所が開設される、
その時に沖縄県会に於いて沖縄那覇近郊に療養所を設置
するために議論した、「将来の那覇の発展を阻害する
おそれがある」ということで反対その後も各地で反対にあった。
- 1932（昭和7）年 嵐山事件
1935（昭和10）年 屋部の焼き討ち事件
各地を追われ、羽地内海の無人島ジャルマ島にたどり着くが、
そこは風葬の島で水もない場所であった。

青木恵哉（本名 青木安次郎・徳島県出身）

1927（昭和2）年、熊本回春病院から沖縄に派遣される。

本部備瀬、屋部を拠点に各地にいる病者にキリストの教えを伝える。

名護市済井出大堂原に大城平永と協力し1500坪ずつ2回にわたって購入、後に沖縄愛楽園となる。

青木恵哉は愛楽園建設の中心人物であったことは知られているが、愛楽園開園を45歳で迎えてから1969（昭和44）年に76歳で亡くなるまでどのように暮らしたのかということについてはあまり知られていない。

1916（大正5）年 癩予防に関する件

懲戒検束規定が明記される。

施設長に懲戒検束権が与えられており、独断で入所者を罰することができた

施設長の裁量ひとつで入所者の処遇が決まった

監禁室

1938（昭和13）年の開園時から、入所者を監禁するため

3畳4間に区切られた木造平屋建てが設置されていた

1940（昭和15）年には沖縄県癩予防協会がコンクリート建ての監禁室を寄付する

1961（昭和36）年 琉球政府（当時）はハンセン氏病予防法を公布

「らい予防法」との違いは退所規定があることと、療養所へ入所せず在宅治療が出来る条項がある点、本土復帰後も沖縄では特別処置として実施された。



【基調講演】

きんじょう まさはる
金城 雅春

国立療養所沖縄愛楽園自治会会長

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介頂きました沖縄愛楽園自治会の金城です。よろしくお願い致します。今日は愛楽園の歴史に学ぶということで、お話をさせていただきます。

皆さん愛楽園に行かれたことはありますか。愛楽園を上空から見るとこのような景色^{*1}になっています。名護市屋我地島の北端に愛楽園があります。周りを海に囲まれていて非常に風光明媚なところです。今は大分整備されていて、非常に交通機関も大分整備されたので、行き来が非常に楽になっています。

現在の入所者数が158人。平均年齢が83.61歳ということで、非常に高齢な方たちが現在生活をされています。

入所されている方は既に完治しております。高齢と病気の後遺症のために現在愛楽園で生活しています。



*1 上空から見た愛楽園

これは那覇市辻の海側に位置する三文珠（さんもうじ）という公園付近の様子^{*2}ですね。ここにハンセン病患者たちが集まって生活していたと思われる場所です。

これは国頭の安波（あは）での様子^{*3}です。写真のように沖縄県内の離島も含めて、病気が発症すると家族は離れて、小屋を作って生活していたというのが沖縄での様子です。これは本土でもほぼ同じで、病気が発症すると家族と離れて生活をされました。

これは、最初にできたハンセン病に関する法律^{*4}です。明治40（1907）年に第11号として法律ができました。この法律は隔離をする法律ということで作られています。

その2年後には北は青森から、南は菊池、（熊本）まで全国5か所に療養所が開設されます。そのとき沖縄でも療養所を作ろうということで、県議会で療養地の候補があがったのですが、やはり地域住民の反対もありできなかったとお聞きしております。

その後、沖縄本島、恩納村、北の方に向かい、名護にたどり着いたのが、昭和になってからです。



*2 かつてハンセン病患者が生活した場所（三文珠）



*3 家族と離れて暮らす子どもの様子（安波）

*4：らい予防法（らいよぼうほう）

明治40（1907）年、「放浪癩（らい）」と呼ばれる患者・元患者を、ハンセン病療養所に入所させるために、法律「癩（らい）予防二関スル件」が制定された。（ハンセン病患者全体の5%程度が対象）

その後、昭和6（1931）年に同法が改訂され「癩予防法」（旧法）が制定される。日本国内全てのハンセン病患者を療養所に強制隔離できるようになる。

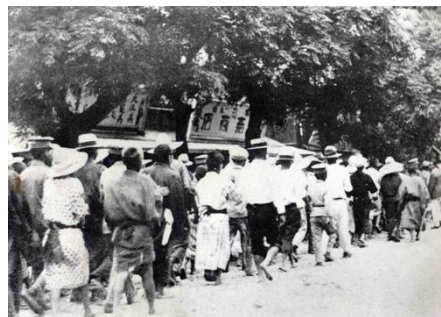
さらに、昭和28（1953）年には「らい予防法」に改訂されるが、「強制隔離」「懲戒検束権」などはそのまま残った。医学の進歩により、治療が可能となっていたにもかかわらず、隔離政策は平成8（1996）年に法律が廃止されるまで続いた。

これが嵐山事件の名護でのデモ行進の様子*5です。2万人規模のデモ行進があったと言われています。

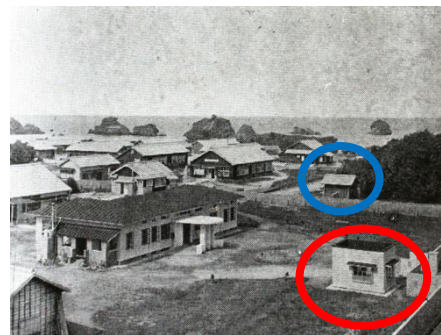
沖縄のハンセン病にとっては切っても切り離せないのが青木恵哉です。本名が青木安次郎、徳島県出身です。この方もハンセン病を患っている身で、キリスト教を学び、伝道師となって沖縄に昭和2(1927)年に派遣されました。彼は沖縄県内に点在している、先ほどお見せした写真のようなところ*2、3に行きキリスト教の教えを広めていきました。

このような出来事もあり青木恵哉は沖縄にも療養所が欲しいということで色々働きかけをしました。そこで、済井出(すみいで)の大堂原(うらどうばる)、現在の愛楽園の地に済井出出身の大城平永と一緒に、1,500坪ずつ、2回に渡って土地を求めたそうです。それが後の愛楽園になっていきます。青木恵哉は45歳で愛楽園の開園を迎えて、76歳で亡くなるまで愛楽園で生活をされたそうです。

これは開園当初の愛楽園の様子*6です。この赤い丸の部分が守衛室で正門に設けられていて、療養所の外への出入りが簡単できないよう周りはコンクリートの塀で囲まれています。青い丸の部分が面会室です。この場所でしか面会ができません。



*5 名護でのデモ行進の様子

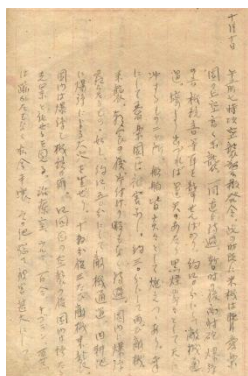


*6 開園当初の(愛楽)愛楽園

これが愛楽園での監禁室の様子です。高いコンクリートの塀で囲まれていて出入口が一か所です。大きな南京錠で閉じられた鉄格子は簡単には開きません。監禁室は中で区切られていて、小さな窓だけが開いていて、非常に暗いところです。

これは嘉手納農林高校で、駐屯の野営をやっていた兵隊さんたちの陣中の日誌です。ここにハンセン病についての記述が載っております。7月9日、日曜日、晴れ。「住民らい病患者あるにつき、外出時住民特に子どもの手を触れざること、外出、帰隊するときは、よく手を洗うこと」と日誌に書かれています。日本軍も非常にハンセン病については気を付けていました。まだハンセン病を治す薬ができていない時期です。その後戦争が近づいてくると、入所者の青年男女が昼夜を問わず防空壕掘りをし、昭和19(1944)年の10月10日の十・十空襲から愛楽園は初めて爆撃を受けるわけです。防空壕を掘ったおかげで、たくさんの人たちがこの防空壕に逃げ込み、戦争で被弾したのは1名と記録されています。しかし、戦争による犠牲者は317名と平和の礎に刻銘されております。戦時中ですからこの方たちは食べるものがなく栄養失調になったり、マラリア、防空壕掘りのために傷を作って破傷風になった方、計317名も亡くなっていたというのが愛楽園の戦争です。

これは自治会の先輩である方たちが書いた記録*7です。十・十空襲の様子ということで、県内は散々たる光景と化したということで、ほとんどの建物が焼けてしまったということが記録されております。



*7 十・十空襲の様子
四回目の空襲の後 園内は惨たる光景と化せるを見る。治療室、ウルマ、百合、ナゴラン、芭蕉はあとかたもなく、松舎半壊、その他全て被害甚大

現在も残っております防空壕の跡が残っており、追体験をするためにみなさまに開放しています。

このような記録や建物を現在は戦争遺跡として残していこうということで保存をしています。

戦時中は毎日と言ってもいいほど亡くなっております。多いときは4、5名も亡くなったことがあります。

戦争中は火葬ができないので、海岸、砂浜に埋めていて、戦後、落ち着いてから、この人たちの遺骨を集め、火葬して、今は納骨堂に入っています。



*8 ドクター・スコアブランドの銅像

これは戦後復興にご尽力頂いたドクター・スコアブランドの銅像*8です。スコアブランドが持ちこんだこういう兵舎を組み立てて病棟にしております。

戦後琉球政府ができて、その後琉球政府はハンセン病予防法を作りまして、平成8(1996)年に廃止されたらい予防法*4との違いは、退所規定があるということ、それから在宅治療ができるということ。この2点が本土と大きく違うところです。この予防法はWHO(世界保健機構)の指示に従って、琉球政府の当時の公衆衛生の先生方が、努力し作られたものだと思います。

これは感染し療養所の中に連れてこられた子ども達*9です。

子どもであってもハンセン病になってしまうと、親兄弟から引き離されてしまいました。

そういう子どもたちの教育機関として小学校と中学校が併設されました。高校は本土の方に行き、進学をしなければなりません。しかし沖縄の多くの子どもたちは中学校を卒業するまでに退所して、一般の中学から一般の高校に行っております。

これは声なき子どもたちの碑*10ということで、療養所の中では子どもができるのと強制的に墮胎されていた。子孫を残さない方策を日本政府はとっていたわけです。そのために女の人は墮胎させられ、男の人は子どもができないように断種が強制されていたわけです。そのために、多くの生まれてくるはずの子どもたちが闇に葬られました。

そういうことで、本当に沖縄の愛楽園、戦争、またこういう断種、墮胎という子孫を持たせない政策、人権を無視したようなことが平然と行われていた。

今、愛楽園では交流会館ができてハンセン病の歴史がより詳しく分かるように展示室を設けています。どうぞ皆様も山原(やんばる：沖縄本島北部の自然が多く残る山地)に行く機会がありましたら立ち寄ってみてください。ハンセン病について分かりやすく学べるように展示しています。また資料も一か所にまと



*9 療養所に連れて来られた子どもたち



*10 声なき子どもたちの碑

とめてあるので申し入れがあれば見るすることができます。膨大な資料が蓄積されていますので、どうぞ見て頂ければと思います。

駆け足で話をしてきましたが、どうぞハンセン病に感心を持って、ご協力頂いて、みなさまが多くの人たちに末長く伝えて頂ければと思います。ありがとうございました。

*国立療養所沖縄愛楽園

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/hansen/airakuen/site/top.html

*国立ハンセン病資料館

<http://www.hansen-dis.jp>

*国立ハンセン病療養所(厚生労働省)

http://www1.mhlw.go.jp/link/link_hosp_12/hosplist/nc.html

◆ ◇ ◆ ◇ 第一部 シンポジウム ◇ ◆ ◇ ◆

【パネルディスカッション】

○ パネリスト

たなはら みお 棚原 未央さん（中城村立中城中学校・2年）

くし けんすけ 久志 顕介さん（名護市立久辺中学校・2年）

とくち れいり 渡久地 礼季さん（沖縄カトリック高等学校・2年）

○ コメンテーター

きんじょう まさはる 金城 雅春さん（国立療養所沖縄愛楽園自治会会長）

のむら けん 野村 謙さん（国立療養所沖縄愛楽園園長）

○ コーディネーター

横田 洋三（法務省特別顧問、公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長）



【横田】

みなさん、こんにちは。ご紹介頂きました横田でございます。今日の催しの中で、中学生・高校生が参加するパネルディスカッションの部に入ります。

最初に3人の中学生・高校生にハンセン病に関する作文を用意していただきましたので、それを紹介していただきたいと思います。最初は中城村立中城中学校の棚原未央さんに発表していただきますが、この作文は平成28年度の第36回全国中学生作文コンテスト沖縄県大会において、入選された作品で、それを今日は紹介して頂きます。それでは棚原さん、よろしくお願いします。

ハンセン病を通して

中城村立中城中学校2年 棚原未央

あなたは人権の意味を本当に知っていますか？私は人権のことをよく知りませんでした。知らなくてもいいと思っていました。人権、それは人間が人間として生まれてきた以上、誰もが同じように人間として尊重されなければならないということです。そんな人権の基本的なことを尊重されなかったハンセン病について私は調べてみることにしました。

ハンセン病、みなさんはこの病気について知っていますか？ハンセン病はらい菌という細菌からなるものです。本来、この病気は感染力が非常に弱いと言われています。しかし、手の指や足の指が無くなり、顔の皮膚も爛れていき、体の一部が壊死していくので、昔の人々はそういう人たちを山奥に捨てたそうです。

私がハンセン病について調べようと思ったきっかけは、母方のお爺ちゃんの姉です。私のお爺ちゃんの姉は3年前に愛楽園でハンセン病患者として息を引き取ったそうです。母も私も3年前にお爺ちゃんの姉が亡くなったとしか聞いておらず、告別式には参加させてくれませんでした。

私はそのことを聞いて、ハンセン病について興味が湧きました。そしてお爺ちゃんに話を聞くことにしました。するとお爺ちゃんは重々しく、昔のことを語ってくれました。当時ハンセン病は治ることのない不治の病、感染する病気として周りから嫌われていたそうです。お爺ちゃんの姉は家族に感染させないよう、隔離されたそうです。また、周りから家族にハンセン病患者がいると分かると、日本の恥などと言われ、ひどい仕打ちを受け、その上、お前たちも感染していると疑われ、自分達までもみんなから嫌われるのです。今では薬を使って治せるので心配はいりませんが、昔のことがあったから告別式には呼ばなかったそうです。私はお爺ちゃんの話聞いて、もっと知りたい、もっと分かりたいという思いで、お爺ちゃんの姉がいた愛楽園に行ってみました。最初に愛楽園の中にある資料図書館に行ってみることにしました。私はそこでハンセン病患者の今までの辛い日々を見て、同じ人間として生まれてきたのにどうしてこんなに残酷なんだろうと思いました。



中でも、とても悲惨だったのは断種手術というものです。ハンセン病患者の男の人は断種手術を強制させられていたそうです。アメリカの人たちに周りを囲まれ、麻酔も消毒もなしでコンクリートの上で切られたそうです。切られた後には誰にもばれないように気をつけていたそうです。

女の人は赤ちゃんが生まれないようにおへそのあたりに看護師が赤ちゃんめがけて針を刺して、赤ちゃんが動かなくするそうです。

そのことを知ったとき、胸が締め付けられそうで痛かったです。同じ人間なのに、何の罪もない人なのに、とても驚きました。一生懸命に日々を過ごしているのに、どうしてそういうことをするのかと、悲しみと悔しさが心の中をうごめいていました。今現在、愛楽園には187名近くの方達がいいます(作品執筆当時)。それほどの人たちが今でも必死で生きています。

その中で、最も高齢者の方は、102歳の元気なおばあさんです。その方は手の指が第2関節くらいまでしかありませんでした。しかし、とても頭の回転が早く今までの苦勞を吹き飛ばすくらいの元気があり、とても魅力的でした。今世界では多くの人たちが偏見によって人権を奪われています。あなたは本当に人権を知っていますか？もう一度深く考えて欲しいです。誰かの人権を奪っていないか見つめ返して欲しいです。私はハンセン病という病気だけでこんなに苦しい思いをしてきた人たちがたくさんいるとは思いませんでした。それにどこか他人事のように捉えていました。私はこれから一人ひとりが自分らしくいられるように身近な人権侵害を止めていこうと思いました。

【横田】

棚原さん、ありがとうございました。ご自身の経験に基づく、ハンセン病差別の残酷さというものを感じて、自分なりに取り組んでいこうという気持ちが表れていると思いました。

続きまして、名護市立久辺中学校の久志顕介さん、お願いします。

受け入れる社会づくり

名護市立久辺中学校2年 久志顕介

僕たちの学校では、毎年1年生が人権学習に合わせて、ハンセン病学習のため、県内にある施設、沖縄愛楽園に行きます。自分も1年前に行き、ハンセン病のことについてお話を聞きました。そこで僕はとても驚きました。ハンセン病というだけでひどい差別を受け、人権を侵され、苦しい思いをしてきたというのです。でも、ハンセン病は治る病気で感染力も非常に弱いというのに、国は隔離政策をやめなかったというのです。僕はこの事実を知ったとき、次第に憤りを乗り越えて、悲しさを覚えました。

国はなぜ隔離し続けたのか。なぜ人権が侵されているにも関わらず対応が遅かったのかと。その事実を知った僕が恐れていることが一つあります。それは風化です。この事実は決して風化させてはなりません。国の誤った政策、一般市民に植え付けられた誤った知識、それにより深い傷を負ったハンセン病元患者の問題は社会全体で反省すべきことだと思います。社会全体で反省する。それは受け入れる社会づくりをすることだと思います。ハンセン病元患者の心の傷は深く重く、まだまだ癒えていない部分もあると思います。

そこで僕たちは次世代の子たちに伝えていくのです。ハンセン病元患者のみなさまはひどい差別を受けて苦しい思いをしていたんだよ。国は誤った政策で心に傷を与えていたんだよ。そして、ハンセン病は治る病気で感染することはほとんどないんだよ。ハンセン病に対する正しい知識と歴史を教えることが、この事実の風化を防ぐことにつながり、ハンセン病元患者を差別せず、国全体が元患者のみなさまを受け入れて平等に見ることが、ハンセン病元患者の心の傷を癒し、国、そして私たちにできることであり、とても大切なことだと思います。



【横田】

久志さん、どうもありがとうございました。久志さんご自身の経験の中から、この問題に取り組んで、そして自分なりに風化をさせないという気持ちを作品の中で表していると思います。

続きまして、沖縄カトリック高等学校の渡久地礼李さん、お願いします。

全ての人々が堂々と生きられる社会の実現に向けて
沖縄カトリック高等学校2年 渡久地礼李

あれは小学校6年生のときでした。宗教の授業の中でダミアン神父について学ぶ機会がありました。彼は当時ハンセン病患者の隔離施設として使われていたハワイの島に自ら赴き、多くの人々のために生涯を捧げた人でした。その学びが私にとって最初のハンセン病との出会いでした。

そして昨年、学校での平和学習の一環として愛楽園を訪れ、当事者の口からハンセン病の歴史を学んだとき、いかに悲惨なことがあったのかを今までよりも詳しく知ることができました。中でも印象的だったのが、愛楽園の敷地内を見学したときのことです。当時、患者とその家族との面会用施設として使われていた場所がありました。そこは仕切り板で完全に隔離されており、わずかしかないうちで、患者とその家族は触れ合うこともできなかったそうです。また私とそう変わらない年齢のときに、ハンセン病にかかった方の中には、名前を変えて生きることを強いられた人もいました。家族と会えない辛さ、人間らしく生きていけない辛さ



は我が身になぞらえても、胸が締め付けられる思いです。ある方の「入口はあっても出口はない」と言葉には、様々な思いが込められているように感じました。

「ハンセン病は恐ろしい伝染病」、この誤った認識は多くの方の人生を奪いました。そして、この誤った認識に拍車をかけることになった隔離政策。この政策が撤廃されてから20年以上が経ちますが、依然として差別の意識は強く根付いています。一度人々の心に差別や偏見の意識が植えつけられてしまったら、その芽を取り除くことには膨大な時間が掛かるのです。そのことを裏付けるかのように6月23日に発行された新聞には、国連によってハンセン病患者に関する特別報告者が設置されるという記事が載っていました。ハンセン病の人権問題は日本だけの話ではなく、世界中で重要視されている問題なのです。

私はこの差別の意識が人々の無知、無理解によるものだと考えます。そしてこの無知、無理解を変えるためには学びしかないと自身の経験から思い知りました。

おそらく私たちが当事者の話を聞くことができる最後の世代になります。だからこそ私たちのような若い世代が人権についての学びを深め、正しい知識を伝えていくことは一人ひとりの使命であると思います。そこで私は次の3つのことを提案します。

1つ目は、ハンセン病回復者の方との定期的な交流を持つことです。本校では毎年、クリスマスのささやかなお祝いとして、愛楽園にクリスマスカードを送っています。こうした年1回ほどの交流も私たちとハンセン病回復者の方との架け橋になると思います。

2つ目に各地にある療養所や資料館などを積極的に活用することです。実際沖縄に住んでいても、愛楽園や宮古南静園を知らない人がいます。身近なところに目を向けるのは学びを深める良い機会になると思います。

最後に、人権について広く深く考える機会を設けることです。小中高とそれぞれの年齢に合わせて段階的に学び、学生から発信することで多くの人と知識を共有することができると思います。

長い間繰り返されてきた差別の歴史に今こそ終止符を打つときではないでしょうか。ハンセン病によって人々が受けた辛い過去や奪われた人生はもう二度と戻ってきません。だからこそ私たちがその思いを紡ぎ、後世に残すことが大切です。ハンセン病で苦しんだ全ての人が堂々と生きられる社会の実現に向けて、小さくとも確かな一歩を踏み出します。

【横田】

渡久地さん、ありがとうございました。

3人の中学生、高校生に作文を紹介して頂きました。最初に棚原さんにちょっと伺いたいのですが、3人ともですけど、沖縄愛楽園に行ったことによって非常に大きな影響を受けたということを書いているんですけど、そもそも愛楽園に行くきっかけはどういう風にできたのか、ちょっとお話し頂けますか？

【棚原】

お爺ちゃんの姉がハンセン病患者というのを知って、ハンセン病を最初は知らなかったけれど、興味が湧いてきたので、愛楽園に訪れました。

【横田】

一人で行ったのですか？それとも誰かと一緒に？

【棚原】

お爺ちゃんとお母さんと一緒に行きました。

【横田】

そうなんですか。それはまた他のみなさんの中にも、そういう形で家族でもっとハンセン病のことを知っておこうということが多いかも知れませんが、棚原さんの場合はその先駆けのような形で愛楽園に行か

れた訳ですね。どうもありがとう。

同じように、久志さんも愛楽園に行って非常に印象を深めたということだったんですけど、久志さんの場合はどういうきっかけがあったんですか？

【久志】

僕たちの学校では、毎年1年生が総合学習の時間で人権を学ぼうということで、人権を学ぶのと一緒にハンセン病のことに学ぼうということで県内の施設、沖縄愛楽園に行って、ハンセン病元患者の方から直接お話を聞いたり展示室を見たりして、人権ってなんだろう、人権を守るためにはどうしたらいいんだろうというのを自分なりの答えを出して、自分の出した意見を大切に、これから身近にいる友達であったり、これから出会うたくさんの人たちの人権を守っていかうというのが沖縄愛楽園に訪問する目的です。



【横田】

そうすると、人権を勉強するということがあって、具体的な例として、沖縄愛楽園というものを選んだということですね。

それは教科でいうとどういう科目に関係するのですか？ どのような関係の先生が指導されたのですか？

【久志】

これは総合学習の時間と道徳学習の時間の合併でハンセン病について学ぼう、人権について学ぼうということで実施されています。

【横田】

なるほど。そうすると、さっきの棚原さんの場合には自分の個人的関心から始まって家族でということですが、久志さんの場合にはむしろ学校が人権の問題に取り組む中で、みんなと一緒に愛楽園に行こうという形で行ったわけですね。よく分かりました。

渡久地さんの方は最初の作文の中で既に学校の平和学習の中でそれを扱ったということを説明されていますね。それで事情がよく分かったのですけれども、渡久地さんの中には作文の中で一つ、私の心にも残るような言葉、これは渡久地さん自身が非常に印象深かったので作文の中に書いてある、ハンセン病で療養所に入れられた人たちが、療養所のことを「入口があっても出口がないところ」と、それが渡久地さんにとっては非常に心に残っていたということですが、その場合にその言葉の中には様々な意味が込められている、そういう風に受け止めたということだったんですが、その辺の気持ちをちょっと説明して頂けますか。

【渡久地】

このハンセン病は治ったらすぐに帰れるって多くの方が思って入所したところ、なかなかそうはいかなくて何年も帰れないって、そういう面や、愛楽園に訪れた際に納骨堂があって、亡くなった後も家族と一緒にのお墓に入れないって、そういうことがとても衝撃的で、そういった意味がこの「出口はない」という言葉に込められていると思います。

【横田】

なるほど。このことは先ほど基調講演で金城さんが話された、最初聞いたときには3か月で帰れると言われていたのが、実は法律が改正されるまで37年も居ざるを得なくなったというお話の中にも、象徴的に表れていますね。そういう一旦入ったら出られないところという受け止められ方をしていたというのが、このハンセン病の療養所の非常に残酷なところだと思いますね。そのことを渡久地さんは感じられたわけですね。

3人の作文を紹介して頂いて、色々印象があると思いますが、この点について、先ほど基調講演をしてく

ださった金城さんと、沖縄愛楽園の園長の野村さん、お2人がおられますので、短くこの作文を聞いての印象を含めた感想を紹介していただけるとありがたいと思います。最初に金城さんよろしいでしょうか。

【金城】

3名の学生たちがよく話を聞いたり見たりしているなと思います。やはりこういう年代の子どもたちには非常にショッキングなことが愛楽園で行われていたという、今の時代の中では見ることのできないことが園内では行われていたというのが作文の方でも出ていたんじゃないかと思います。

先ほどもありました通り、入口があっても出口がないとかという話とか、そういう問題とか、また園内に納骨堂があるという。普通の一般の病院では亡くなったら自分のお墓に入るとか、そういうことですが、ハンセン病の患者たちは火葬して納骨堂に入れられる。

愛楽園の火葬場というの、沖縄県内で2番目にできた火葬場です。那覇に最初にできて2番目にできた。これは何を意味しているかをみなさんで考えて頂ければと思います。

こういう風にして、非常にそれぞれの意見がこの作文の中に書かれております。3つの提案もあったし、またこれから風化させないためにどうすればいいのかということですね。我々自治会ではボランティアガイド、養成講座を毎年開いております。これは何をしているかと言いますと、ハンセン病の入所者たちは平均年齢がもうすぐ84歳になります。若いころは自分たちで案内ができたものが、できなくなってきている。

それに代わる人たち、語り継いでいく人たちを養成していこうということで、毎年やっています。もう今年は終わりましたけれど、また来年もやりますので、どうぞ興味のある方は参加して頂ければと思います。色んな平和の問題とか人権の問題とか学べる場所にしておりますので、是非とも愛楽園にきて頂ければと思います。こういう風にして子どもたちと同じようなことが皆様の頭に浮かんでくるんじゃないかと思います。



【野村】

3人の生徒さんのお話を聞かせて頂いて、やっぱり関心を持つということがどんなに素晴らしいことかなと思いました。関心こそが一番考えるべきことで、関心を持つことで愛楽園に行くことになり、それが自分のものとして考えるきっかけになっているということですから。ここにいらっしゃった皆様も是非沖縄にお住いの方でしたら愛楽園にきて頂いて、見るだけでその場に居るだけで何か感じ取るものがあると思います。この3人の生徒さんのように色んなことを感じて頂きたいなと思いました。

【横田】

野村先生の場合にはお医者さんとして愛楽園に関わり、そして患者さんを診て、お医者さんとして、同時に1人の人間として、この人たちの人権が守られていないことに関する疑問点などを感じられたと思います。ハンセン病は感染力も弱いし、うつらないし、治るんですよって言っても、差別はすぐなくなるかというと、なかなかなくなるという問題がある。その辺りについて、お医者さんとしてどういう風に受け止めておられるか、ちょっとお聞きいただけますか？

【野村】

私が愛楽園に勤務したのは、ちょうど法律（らい予防法）が廃止になった年（平成8（1996）年）に行くようになりました。僕は医者として医学部生としてハンセン病について何も学びがありませんでした。それで、初めて行くときに「大丈夫なの？あんなあっちに行って」というか、『愛楽園ってハンセン病でしょ、行って大丈夫なの？』って僕は周りの同僚から言われました。

【横田】

お医者さん自身からもそう言われたと。

【野村】

実際、またこちらから入所者の皆様を紹介する先の病院でもそういう、「ハンセン病だけど受けて大丈夫なの？」というような、どういう風に見たらいいのという問い合わせを受けたり、というのもありましたね。

小中高とたくさんの児童・生徒の方がいらっしゃいますけど、看護学生が多いです。医学部の学生はいないのです。なので、今年から琉球大学の医学部の2年生が来て頂けることになったのがすごく嬉しくて、まずらい予防法についても医者が大きく関わってできたところもあるので、医者の無理解とか、そういうのも非常に痛感しますね。僕が愛楽園行ったときに、応診というか部屋に行くと名前が2つあった。夫婦で名前が違うとか、カルテを見ると園命って書いてあるのはすごくショックを受けました。園命、本名って書いてあるんですよ。名前が2つあって全く違う名前が書いてある。「なんですか…これは？」って、びっくりしました。

園外のことを入所者の皆様は社会と呼んでいるんですよ。これもショックでした。「社会に行くんだけど、許可証書いてくれませんか？」っていうのを、医者のサインが必要だったということで、それも驚きでした。「社会に行くから、許可証を書いてくれ」って言われて、僕もたくさん書きましたけど。これがすごくショックでした。

【横田】

ありがとうございます。園長先生でなければ、あるいはお医者さんでなければ分からなかったところを私たちに教えて頂いて、大変勉強になりました。

金城さん、野村先生が仰った中で、療養所に入ると名前を変えるってということが非常に一般的だったと。金城さんの先ほどの話にもあったかも知れませんが、私の知る限り日本の療養所では非常に頻繁に行われていたのですが、そのことについて、理由とか事情等の辺について簡単に説明して頂けますか？

【金城】

先ほど園名と本名ということで1人で2つ名前を持っていると、ペンネームまでがあると3つも持っているとか、そういう人がいる。この人たちはなぜそういうことをしたかという、本名で生きていくと自分の家族、親族に迷惑がかかるということで、園名をつけたわけです。そして全く知らない、無関係というようなことにしているわけですね。家族と縁を切る、名前を変えていくということが行われている。これは全国の療養所も一緒です。私は1980（昭和55）年に入所したのですが、もう私の時代にはそういうこともなくて、私はずっと本名で通したので生まれたときから一緒です。そういうことで、若い人たちはそういう風に本名でそのまま通している。しかし平成8（1996）年にらい予防法が廃止されて、その後裁判を起こして、判決が確定した後、人間に戻ったということで多くの人たちが本名に戻っています。愛楽園でもほとんどの方が本名で生活をするようになってきました。そういうことで、こういう曲がった社会で生きていたという人たちです。ハンセン病の人たち、そして戦争中に亡くなった人たちは、愛楽園に入っていたということで、戸籍も持っていない、戸籍にも抹消されて載っていない。沖縄では皆様ご承知の通り、戸籍が喪失して、戦後になって戸籍を作り直したと、そのときに亡くなった人たちの戸籍は載っていないというのがほとんどだったと思います。愛楽園でもそういったことで、たくさんの人たちが亡くなった人はもちろんですが、愛楽園に入所している人たちも戸籍がなかったという人たちが、戦後になってたくさん出てきたというのがあります。

選挙権が得られるということで、色々調べてみて選挙権がないという。戸籍がないということで、選挙権がない。ついこの間の裁判のときには、遺族提訴をするためにやろうとしたら、そこに遺族の系統立てた戸籍がないということで、相続もできないとのことでした。

戦時中に子どもを産んだのですが、この子たちは兄弟の子とか親の戸籍に載ってしまって、本人の子じゃ



なくなっている。そういったことで相続ができないというようなことも起こっております。

ですから、色んなところでまだ目に見えないこと人権を無視したようなことが行われていたというのがハンセン病療養所です。

【横田】

ありがとうございました。名前が変えられたり、2つ持っていたり、3つ持っていたりという事情はよく聞くのですが、今のお話でよく分かりました。どうもありがとうございました。

今日はですね、3人の中学生、高校生に自分たちがどうしてハンセン病に関心を持つようになったか、そして実際に沖縄愛楽園に行って入所者の話を聞くことによって一層ハンセン病に対する差別、それからそれを国として強制入院という形でもって、ハンセン病の患者さんを差別し人権を無視してきたということ、それに対して若い学生として「こんなことがあっていいのだろうか」と疑問を持って、そしてそれをなんとか自分たちの世代で受け止めて、将来に向けてこういうことが起こらないようにしようという決意を色んな形で表現してくれたと思うんです。そういう点で、これまで起こった出来事そのものは私たちとしては反省して受け止めなければいけませんが、同時にこういう若い人たちがそれから学んで、更に将来を明るくしようということで、作文にその気持ちを込めていたっていうのは、私たちにとって大変勇気づけられることではないかと思います。

3人の作文の中でもう一つ、私が非常にありがたい、嬉しいと思ったことは、テーマはハンセン病の差別ですけども、それをきっかけにして他の差別で苦しんでいる人に対する一つの思いやり、理解、そういうものを今後深めていきたいということが、色んな形で作文の中に表れていたと思います。これも大変大事で、差別に苦しんでいる人は今も世界中にたくさんいます。日本にもたくさんいます。こういう人たちもやはりハンセン病の患者さんたちが経験したのと同じような差別を今も経験している可能性がありますので、そういうことも含めて人権一般にも理解を深めるっていうことが大事だなということを感じました。

今日はこういう形で若い人たちに、この問題について自分たちの受け止め方を紹介してもらい、それから愛楽園に関係している自治会の会長さんと、それから、園長さんにコメントをして頂くという形で、このパネルの趣旨は十分に活かされたのではないかと。私も色々教えて頂いたと思います。会場のみなさまと一緒にこのパネリストのみなさんに感謝をしたいと思います。どうもありがとうございました。



◆ ◇ ◆ ◇ 第二部 映画上映 ◇ ◆ ◇ ◆

[映画「あん」]



たくさんの涙を超えて、 生きていく意味を問いかける

「私達はこの世を見るために、聞くために、生まれてきた。
この世は、ただそれだけを望んでいた。…だとすれば、何か
になれなくても、私達には生きる意味があるのよ。」

縁あってどら焼き屋「どら春」の雇われ店長として単調な日々をこなしていた千太郎
(永瀬正敏)。そのお店の常連である中学生のワカナ(内田伽羅)。ある日、その店
の求人募集の貼り紙をみて、そこで働くことを懇願する一人の老女、徳江(樹木希
林)が現れ、どらやきの粒あん作りを任せることに。徳江の作った粒あんはあまりに
美味しく、みるみるうちに店は繁盛。しかし心ない噂が、彼らの運命を大きく変えてい



【出演】樹木希林(徳江) / 永瀬正敏(千太郎) / 内田伽羅(ワカナ) / 市原悦子(佳子) / 浅田美代子(どら春のオーナー) / 水野美紀(ワカナの母) / 太賀(陽平) / 兼松若人(若人) / 【監督】河瀬直美 / 【原作】「あん」ドリアン助川・著(ポプラ社刊) / 【主題歌】秦基博「水彩の月」(AUGUSTA RECORDS / Ariola Japan)

「あん」ウェブサイト <http://an-movie.com/>

第 68 回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門オープニングフィルム / ヴェネツィア国際映画祭「長編コンペティション」部門・最優秀作品賞、最優秀女優賞(樹木希林) / アジア太平洋スクリーンアワード「女優賞」(樹木希林) / バリャドリッド国際映画祭「最優秀監督賞」 / サンパウロ国際映画祭「観客賞」 / コーク国際映画祭「観客賞」 / トロント国際映画祭「コンテンポラリー・ワールド・シネマ部門」出品作 / 第 40 回報知映画賞「主演女優賞」(樹木希林) / 第 7 回 TAMA 映画賞「最優秀女優賞」(樹木希林)・最優秀男優賞(永瀬正敏) / 山路ふみ子女優賞(樹木希林) / 第 39 回日本アカデミー賞「優秀主演女優賞」(樹木希林) / 第 37 回ヨコハマ映画祭「主演男優賞」(永瀬正敏)・「特別大賞」(樹木希林)・日本映画ベストテン第 6 位 / 第 89 回キネマ旬報ベスト・テン 読者選出日本映画ベスト・テン 第 3 位 / 2015 年度全国映連賞「監督賞」(河瀬直美)



すけがわ
ドリアン助川

作家、詩の道化師。東京都生まれ、神戸育ち。早稲田大学時代に劇団を主宰し、卒業後は雑誌ライター、放送作家などを経て、ドリアン助川の名で「叫ぶ詩人の会」を結成。ドリアン助川名義以外でも、執筆やライブ活動など精力的に芸能活動を継続。ニッポン放送系列の深夜ラジオ番組「ドリアン助川の正義のラジオ! ジャンベルジャン!」が若者の人気を集め、若者に向けて真摯で辛辣なコメントを投じることから当時出演していた TV 番組の名前通り“金髪先生”とも言われていた時期がある。映画では河瀬直美監督の『朱花(はねつ)の月』(11)に出演経験がある。著書に『あん』(13)をはじめ、『ゲーテのコトバ』(12)、絵本『クロコダイルとイルカ』(13)、『多摩川物語』(14)、『あなたという国: ニューヨーク・サン・ソウル』(16)、絵本『メガロポリス 空から宇宙人がやってきた!』(翻訳/16)『坂道 Les Pentes』(16)等。



あさだ みよこ
浅田 美代子

1973 (昭和 48) 年、TBS のテレビドラマ「時間ですよ」でデビュー。同ドラマの挿入歌「赤い風船」で歌手としてもデビューし、日本レコード大賞新人賞を受賞。翌年のドラマ「寺内貫太郎一家」などにも出演するが、1977 (昭和 52) 年に引退。

1984 (昭和 59) 年、芸能界に復帰し、映画「釣りバカ日誌」シリーズに主人公の妻役をはじめ、舞台「春日局」「雪国」、テレビドラマ「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」、「さんまのスーパーからくり TV」などのバラエティ番組など多方面で活躍。

映画「あん」では、どら焼きや『どら春』のオーナー役として出演している。

芸能活動の傍ら、保護犬を引き取り、動物の愛護、福祉活動に取り組んでいる。また、小学校等で「いのちの教室」を開くなど、殺処分ゼロを目指した活動も展開している。

TierLove

<https://www.tierlove.jp/>

◆ ◇ ◆ ◇ 第二部 映画上映 ◇ ◆ ◇ ◆

【対談／トークショー】

ドリアン^{すけがわ}助川（作家、詩の道化師） ※ 「あん」原作者

浅田^{あさだ みよこ}美代子（女優） ※ 映画「あん」出演

【助川】

どうもみなさん、ドリアン助川です。

【樹木】

こんにちは、浅田美代子です。

【助川】

2時間映画を観て頂いたあとで、また30分ほどですが、私たちの話も聞いて頂こうかなと思います。

浅田さん、なかなかやりにくい役（どら焼き屋「どら春」のオーナー）だったんじゃないかと思うのですが、初めて台本読んだときどうでした？



【浅田】

多分普通の人の感性なんだろうなと思ったので、意地悪っていうよりも、そういう風に見てしまう人の方が多いのかも知れないなと思ったので、(役を)やらせて頂こうかなと思いました。

【助川】

これは舞台設定としては、らい予防法^{*1}という元患者（ハンセン病）さんたちを絶対隔離していた法律が廃止されたのが1996年なんですね。その後1、2年後の時代を考えると書いたんですけど、まだまだ差別が濃厚に残っている頃で、元患者（ハンセン病）さんたちを宿泊させないとか、そういった事件もあった頃ですね。その頃の感覚で書いたものです。

【浅田】

私もハンセン病の病気のことは知っていましたが、やはりこの作品に関わってここまで差別をされていたんだとか、多磨全生園に行ってその資料館（国立ハンセン病資料館）を見て、本当にひどいなと、あれは弱い者いじめのように差別されていたんだと思うと本当に心が痛みましたね。

【助川】

と思いながらも、劇中では結構ひどいことを言ってしまう役でね。小説の方では、小説の中に「この病気は今やもう薬もありますし、完治する病気です」と、フォローらしきものがあるんですけど、映画はちょっとその辺が伝わっていない部分も若干あるかもしれないと、それ

*1 らい予防法（らいよぼうほう）

明治40（1907）年、「放浪癩（らい）」と呼ばれる患者・元患者を、ハンセン病療養所に入所させるために、法律「癩（らい）予防二関スル件」が制定された。（ハンセン病患者全体の5%程度が対象）

その後、昭和6（1931）年に同法が改訂され「癩予防法」（旧法）が制定される。日本国内全てのハンセン病患者を療養所に強制隔離できるようになる。

さらに、昭和28（1953）年には「らい予防法」に改訂されるが、「強制隔離」「懲戒検束権」などはそのまま残った。医学の進歩により、治療が可能となっていたにもかかわらず、隔離政策は平成8（1996）年に法律が廃止されるまで続いた。

は申し訳なかったんですが、
で、犬…？

【浅田】

そうなんです。最初に登場した犬は本当に私が飼っている犬でして、衣装合わせに行ったときに河瀬監督が、私が犬を飼っているのを知っていて「ちょっと犬を連れてきてくれない？」って言われて「なんでなんだろう…？」と思って連れて行ったら「ちょっと貸してくれない？」って言われて「なんなんだろう？」と思ったら出演させて貰っちゃって。

【助川】

どら焼き屋さんの女将さんの役で出てきて、ひどいこと言う前に犬が吠えますよね。普段サイレンの音なんかを聞いたときに「コラ」なんて言うと、ちゃんと言うこときくじゃないですか。だから「あれ？これは阿吽の呼吸だな」と思ったんですけど、本当に飼われている犬なんですか？

【浅田】

そうです。あの子たちも保護犬という犬でして、やっと慣れてきた感じですね。

【助川】

保護犬っていうのは、殺処分される前の犬とかを救っていらっしゃる？

【浅田】

私が思うには日本ってちょっと弱いものに冷たい国だなって。例えばこういう病気の方に対してとか、あいう犬（殺処分される犬）とかの命、あとお年寄りの方とか、小っちゃい子どもとか。弱いものに対してすごい冷たいなって、最近すごくそういう気がしていますね。

【助川】

そう思う部分もあって。この物語を書こうって、自分で決めたのがですね、まさに平成8（1996）年のらい予防法が廃止された頃でね。僕は当時深夜放送のパーソナリティーをやっていたので、ラジオのリスナーたちと、生放送で夜話をする番組なんですね。全国ネットなので沖縄にも来たことあるんですけど、そのときね10代の若者たちに、「僕たちの生きることに意味ってあるんだろう」とか、「人生って意味あるのかな」、みたいなことを聞いたわけです。これは答えが欲しかったわけじゃなくて、考えて欲しくて。だから10人いたら10人別々の答えが返ってきてても全然よかったんですけど、あるいは答えが返ってこなくてもよかったんですけど、瞬間的に10人が同じことを言ったんですよ。ほとんど考える間もなく。

「社会の役に立たないと、生きていく意味がない」とってみんな全員が同じことを言ったのね。それは立派な答えです。それを否定はしないけれども、そのときにふと「社会の役に立たない人は、生きていく意味がないの？」っていう疑問が胸の中に沸いてきて、そのときにこのらい予防法っていう法律のために、病気が治ってもずっと療養所から出られなかったみなさんの運命というものが、頭の中に去来したんですね。

あるいはそのときに関係者のレコード会社のプロデューサーの息子さんがたった2歳で亡くなってしまいうっていう痛ましいことがあって、じゃあこの子の2年間の人生ってどんな意味があったんだろうと思って。

色々な事が、ぐるぐるぐるぐる自分の中にうずまいたんです、そのときにハンセン病問題を背景にして、人の生きることを意味っていうのをもう少し広い意味で、社会の役に立つとか立たないとか、誰が儲けたとか誰が出世したじゃなくて、もっと広い意味で問う小説を書こうと思ったんです。



ただ、自分は医療関係者でもなんでもないのでから、まずハンセン病について勉強するところから始まり、でも何を読んでも、患者さんの手記を読んでも、胸が火傷したようになっちゃって、これは無理だと、一歩も前に進めなかったんです。でもあるとき、僕のライブを見に来てくれたお客さんの中に、東京の多磨全生園の元患者さん3人がいらして、そこから一気に親交が生まれて、療養所の中に入っていきようになつて、そしてこの物語を紡いだということになるんです。

【浅田】

日本はすごい遅かったですよね、ハンセン病は人にうつらない病気だということを発表するのがね。

【助川】

この映画が世界で一番最初に上映されたのはフランスのカンヌ国際映画祭、2015（平成27）年の5月です。ですから2年ちょっと前にこの映画がそこで初めて上映されたんですけど、ものすごいスタンディングオベーションで。カンヌのお客さんっていうのは世界中の映画のバイヤーなんですよ。つまり映画の目利きが来るわけです。この人たちが総立ちでものすごい拍手をしてくれて、それから2週間経たないうちに世界中で上映が決まったんですけど、フランスのLe Monde（ル・モンド）っていう新聞が見開きで特集組んでくれたり、フランスで大変な人気になったんです。そのときにフランスの記者から「日本っていうのは先進国だと信じています。でもこのハンセン病の患者さんたちを、ヨーロッパでは大体1950年代から60年代に隔離が解かれているんです。通院治療の病気になっているんです。30年以上も放ったらかしにしたっていうのは、どういうことが理由なんだ？」って。それについては「自分も明確な答えがないので、どうしてなのか自分にも分かりません」ということを言いました。

皆さん、この映画は世界中で確かに上映されているんですが、2つだけ大変伝わりにくい部分があります。難点があります。まず一つは何か。誰も「あんこ」を知らない。

【浅田】

海外ではね。

【助川】

カンヌだと、フランス語と英語の字幕スーパー出るんですよ。あんこって何っていうか分かります？ sweet red beans paste（甘く赤い豆を練ったもの）って書かれるんですよ。まあそうなんだけど…ちょっと違うような気もする。どら焼きはもっとひどいですよ。pan cake with sweet red beans paste（甘く赤い豆を練ったもの）…長いよ…。何を食べているか全く分からないまま世界中の人は観ています。

【浅田】

海外は意外とお豆っていうと（スイーツではなく）料理の方に使ったりするじゃないですか。

【助川】

豆を甘くするっていうのが生理的に耐えられない。

でも、今やフランスではどら焼きは、もうブームは過ぎ去りましたけれども、フランスではみんなに理解される食べ物になりました、どら焼きは。フランスの方はどら焼き、どうやって食べると思います？

【浅田】

まさか…

【助川】

やっぱりフォークとナイフで食べるんです。

もう一つはね、ハンセン病に対する特效薬というのは1943年だったか44年だかにアメリカでプロミンという薬ができて、これによって治る病気になりました。世界のいわゆる先進国と言われる国々では

どんどん隔離が解かれていくんですけど、これは50年代から60年代。その後も薬の開発が進みまして今は3種類の薬を併用することで、すぐ完治してしまう病気です。

ですから、今日日本の療養所にいらっしゃる方で、患者さんというのは正確に言うといえないんです。みなさん全員元患者さん。発症される方もほとんどいない。日本においては根絶したに等しい病気になっています。なってもその薬がありますので、全く恐れる病気ではないですね。なのに、この徳江さん（映画「あん」の中で樹木希林さんが演じるハンセン病回復者）がね、なんでこんな孤独な思いをしているのかが世界の皆さまには、いまひとつ理解できない。この絶対隔離という状況がどういうことなのかということが分かってないと、この映画のその部分的理解されないということに難点はあるんです。

【浅田】

やっぱりああいう療養所と言われていても、なんか収容所みたいな現実に見えましたけど、あそこに閉じ込められて皆さん生活していたわけですね。別に本当にうつる病気でもないのに、本当になんであんなひどい目にあわなきゃいけないんだろうと思って。

【助川】

感染力は極めて弱くて、このらい菌をもらってしまうのは乳幼児の頃が多いそうなんですけれど、大人でこれをもらって後に発症するっていうのはまぼろがないんですね。日本のハンセン病に携わってきた医療関係者でこの病気をもらっちゃったという人は一人もいません、今まで。それぐらい感染力が弱いんですが、見た目に後遺症が残る場合があるということと、それから戦前までやはり治し方が分からなかったということで恐れられた病気でもあり、差別の対象になったわけですね。

【浅田】

辛い思いを…。

【助川】

特に日本の療養所においては、もちろんこの病気に対する治療も行われたんですけども、なんというか、強制労働にも近い…。例えば多磨全生園で言いますと、患者の逃走防止用に、深い堀を掘らせたわけです。それを患者さんにやらせる。深い堀を掘らせて、その余った土で患者さんたちは丘を築いて、望郷の丘と言うんですけど、そこに登って故郷の方を見て、泣き濡れたという話があります。

中から外に出ることも難しかったんですけど、外から中に入ってくることもできませんので、元患者さんたちは自分たちの技能を寄せ集めて生きていくしかなかった。床屋さんだった人は床屋さんをやり、芸者さんだった人は着付け教室をやり、みんなで力を合わせて。その中で製菓部という人たちがいたんです。お菓子を作り続けた人たちがいた。

この病気は神経を侵していく病気です。指先、足先からどんどん麻痺して行って、最後放っておくと目にもきて、失明をしてしまいます。

指先の感覚がなくなりますから、火傷をしたり、化膿をしても分からない。それから自己免疫もありますからそこがポロっと落ちてしまったりもする。でもね、最後の最後まで残る感覚があるんですよ。全身包帯でグルグル巻きで、例えば目が見えなくなったとしても、舌、味覚、これだけは残るんです。だから甘いもの、美味しいものっていうのに対して貪欲だったんです。だからこの甘いものを作って患者さんたちの誕生日に届ける製菓部っていうのが、各療養所でできたわけですね。この製菓部の存在を知ったときに、それまでに10数年、10枚書いては破り捨てるっていうことを繰り返したんですけど、製菓部の存在を知ったときに、一気に書き始めました。

【浅田】

本当に、映画からあんこの匂いがしてくる感じがして、やっぱり樹木希林さんの、本当になんていうか、すごいですね、あの人は。

【助川】

希林さんってね、すばらしいなと思うんですよ。希林さん、カン又の映画が終わって、何百人という方がスタンディングオベーション、バァーっと熱い拍手されているわけです。5分くらい経ったときに希林さん、何て言ったと思います？「もう帰りましょうよお」。仮にも女優さんとして生きて来られて、カン又のスタンディングオベーションですよ。「なんでですか!？」って言ったら、希林さんやっぱり素晴らしい。「もうみんな手が痛いんだよ、我慢して叩いているんだから帰りましょう」って本当に帰っちゃったの。

【浅田】

本当におかしな人でね（笑）。

【助川】

主演女優が帰っちゃったので私たちも居残るわけにはいかずに帰ったんですが、結果的に世界に広がっていくことになりましたね。

【浅田】

本当に希林さんもがんと闘っていらっしゃるんですけど、こう色んな治療をしながら、元気ですんですけど、たまに「みよちゃん、私って死ぬ死ぬ詐欺に思われてないかしら？」って。「全然思われていないですよ」って言うんですけど、やっぱり希林さん見ててもなんか精神面、楽しいことをなんとかって、落ち込んでないんですよ、全然。



【助川】

希林さんね、色んな国の映画祭に行ったんです。映画の製作委員会や外務省からは「行くな」って言われた場所にも2人で行ってきまして、2年前のウクライナです。ウクライナがロシアにクリミア半島併合されて、国の東側でドンパチやっている頃に「あん」が招待作品になったんですけども。その晩に希林さんから電話かかってきて

樹木さん「もう済んだ話だけどね、そういう国（ウクライナ）だから行ってあげたいわよね」

助川さん「希林さん、それはやっぱり行きたいってということですか？」

樹木さん「そうとも言うわよね」

助川さん「わかりました、今からもう1回掛け合ってみます」。

で、結局私と希林さんは戦争テロ保険っていうのに入れられまして、行ったんですけど、本当に行ってもよかった。アジアから参加したのが2人だけだったので、大事にしてもらってね。国によってやっぱり感動したっていうことの表現が違います。ウクライナでは何というか。ウクライナの女性は感動したって言うときに「口の中まで泣きました」って言うんです。その一人一人ウクライナ美女たちを希林さんが抱きしめていた。

【浅田】

本当に面白いですよ。

【助川】

この映画は公開されたのは2年前です。

【浅田】

そうでした。

【助川】

こうやってここ那覇でもこうして観て頂いて、まだまだどんどん上映が続いていて、私たちのような者も呼ばれることがありますけれども、それぐらいの映画もさることながら、日本中でハンセン病問題というか、回復者さんたちに対して、ひどい歴史があったんだということを思い直す機会が今増えていることが、書いて良かったな、映画を撮れて良かったなという風に思いますね。

【浅田】

ハンセン病というものを知らない若い人たちにも、分かって頂く機会になったし、すごく良かったなと思います。

【助川】

それでね、人権っていう言葉。ごくごく基本的な言葉です。でも人権って人間の権利っていうことですよね。じゃあ人間って何なんだっていうところから考え始めると、結構これは難しいんですよ。

人を差別してはいけませんっていう、割と否定的な意味合いを持ってしまったりあり得るんですけど、例えば多磨全生園にある国立ハンセン病資料館というところに行きますと、こんなひどい目にあいました、こんな辛い思いをしてみましたっていう展示も確かにあるんですけど、その施設の後半で、この逆境の中でみなさんがいかに表現活動してきたかという、例えば指を失くされた方々ばかりのハーモニカバンドの音楽が鳴っています。その人たちの演奏風景があります。そして負けずに頑張ろうねっていうリーダーが書いた詩があります。こういうものに触れていくと、単に悲しみや苦しみに触れたということ以上に、人間の底知れぬ底力っていうか、人間ってすごいんだと。

指を失くされ、目の力を失い、能力を失い、でも舌で点字を読む。指の感覚がないので、指先ではもう点字が読めないんですね。舌読と言いまして、舌で点字を読んでいる風景があります。あるいは、陶器、焼き物をされている方の展示があって、本人の完成した作品の手前に粉々に壊れた陶器の破片の山が飾ってあるんです。そこに何て書いてあるかというと「壊して壊して壊し続ける。それしか本当の作品には出会えない」という。それを見たときに動けなくなっちゃって、自分もこの物語を書くときに何回も破り捨てました。書き直しましたが、この指を失われた方が一つの陶器の壺を作るために、どれだけの壺を壊したんだろうと、打たれて動けなくなった。ものすごく力を与えてもらって帰ってこられる場所なんです。ですから、ハンセン病問題とか人権っていうところの、辛いものに対して目を向けるという印象を持たれる方もいらっしゃるんですけど、人間とはなんだっていうところから見ると、本当にハンセン病患者から学ぶことが多々あるということ、僕はこの20年で学びました。

【浅田】

あの中で、本当に一生懸命それぞれが、頑張って、ましてや家族と離れ離れにさせられていたわけじゃないですか。絶望感、色んな病気のこともそうだし、家族とも離れて、もう絶望感の中にいる中でも何かを見つけたらってすごいなって本当に思いましたね。

【助川】

2009（平成21）年まで日本の自殺者が3万人を毎年超えていたんですね。13年連続で3万人超えていたわけで。今2万数千人（2017（平成29）年自殺者数は21,764人）まで下がってきた。ちょっと経済回復したっていうこともあるんですけど、ところが男性は30代まで、女性は20代までの若年層の自



殺者というのが増え続けていまして、知っていますか皆さん、日本の若年層の自殺率が世界最悪、ワースト1なんです。世界で最も若者が死に急ぐ国になってしまいました。

ハンセン病回復者の84とか85歳で生きてこられた皆さんの、様々な言葉があるんです。人生を乗り越えて生きてこられた方々の。

なんとかね、若い悩んでいるみなさんと、80年以上生きてこられた、逆境を乗り越えてこられた方々の対面というか、お互いの言葉の交流とかがあるといいなと。もちろん差別の問題を掘り起こすことも大事なんだけど、逆に生きてこられたハンセン病の回復者さんたちから学ぶ時代がきているんじゃないかという風に思います。

【浅田】

中学生とか高校生の自殺もすごく増えていますからね。

【助川】

この間も東京の地下鉄で20代のサラリーマンが飛び込んで、なんか暗い気持ちになっちゃったんですけども。でもやっぱり生きていこうよ。何かあっても生きていこうよ。というところで、今80代の元患者さんたちにも、色々話を聞きたい。

【浅田】

色んなゲームとかもよくないと思うんですけどね。すぐボタン一個でピュッと殺したりとか。

【助川】

リセットできちゃうから。

【浅田】

ああいうのも本当に教育的には良くないんじゃないかなと思うけど、でも本当にそういう人たちと話し合いの、交流の場とかあったらすごくいいかもしれない。

【助川】

今日思いつくことばかりを話しましたが、時間になってしまいました。あっという間に30分が過ぎてしまいました。

今日はみなさん、映画「あん」を観て頂き、そして私たちの話も聞いて頂き、どうもありがとうございます。



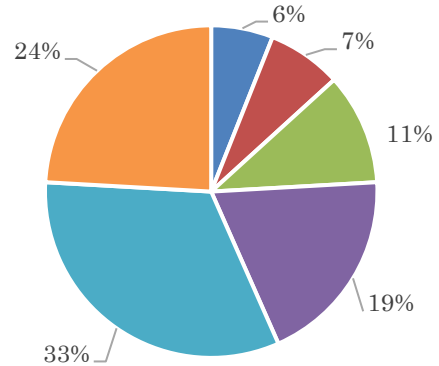
◆ ◇ ◆ ◇ 来場者アンケート集計① ◇ ◆ ◇ ◆

ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」那覇会場 来場者アンケート【中学生以上/大人用】

1. ご自身について、当てはまるもの

(1) 年齢

① 10歳代	5
② 20歳代	6
③ 30歳代	9
④ 40歳代	16
⑤ 50歳代	27
⑥ 60歳以上	20
合計	83



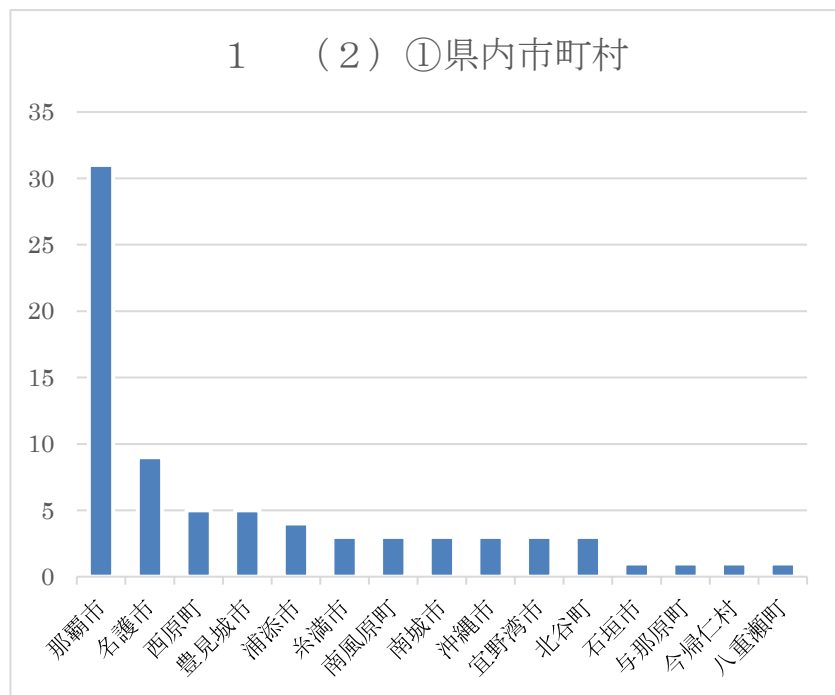
■ ① 10歳代 ■ ② 20歳代 ■ ③ 30歳代
■ ④ 40歳代 ■ ⑤ 50歳代 ■ ⑥ 60歳以上

(2) 居住地

① 沖縄県内	76
② 沖縄県外	5
② その他	2
合計	83

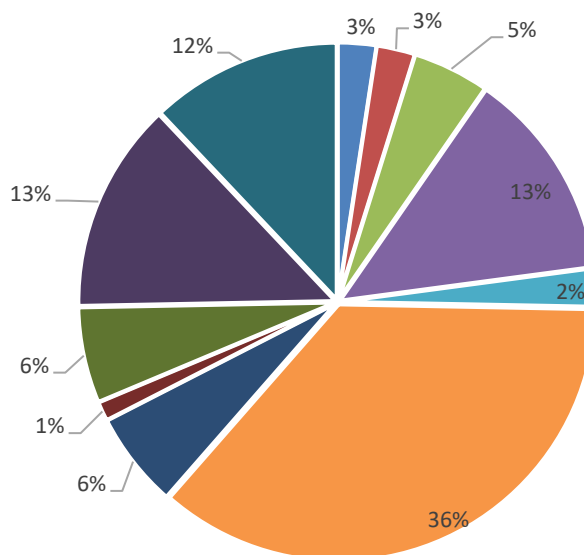
① 沖縄県内	76
那覇市	31
名護市	9
西原町	5
豊見城市	5
浦添市	4
糸満市	3
南風原町	3
南城町	3
沖縄市	3
宜野湾市	3
北谷町	3
石垣市	1
与那原町	1
今帰仁村	1
八重瀬町	1

② 沖縄県外	7
東京都	3
神奈川県	2
その他	2



(3) 職業等

①中学生	2
②高校生	2
③専門学校・大学生	4
④会社員	11
⑤自営業	2
⑥公務員	30
⑦アルバイト・パート	5
⑧派遣・契約社員	1
⑨主婦・主夫	5
⑩無職	11
⑪その他	10
合計	83



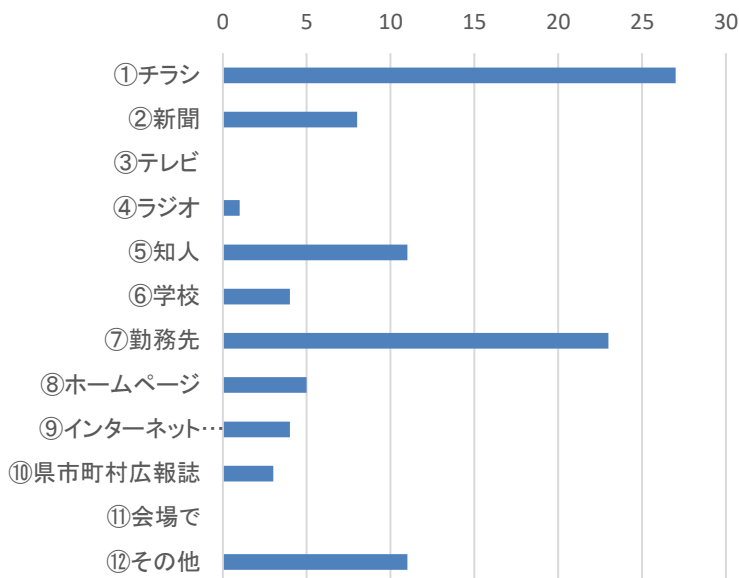
※ 「⑪その他」(自由記述)

団体職員、教員、保育士、
年金生活者、人権擁護委員、
嘱託職員、医療職 など



2. ハンセン病に関する親と子のシンポジウムをどのようにして知りましたか。(複数回答可)

①チラシ	27
②新聞	8
③テレビ	0
④ラジオ	1
⑤知人	11
⑥学校	4
⑦勤務先	23
⑧ホームページ	5
⑨インターネット バナー・テキスト広告	4
⑩県市町村広報誌	3
⑪会場で	0
⑫その他	11
合計	97



※ 「⑫その他」(自由記述)

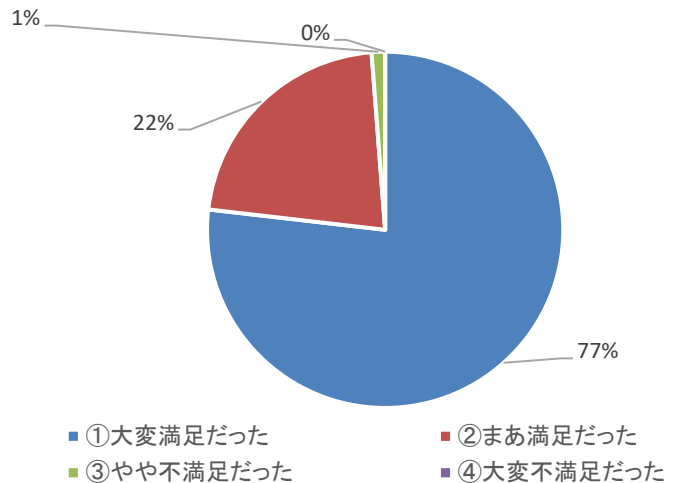
- 家族
- 愛楽園社会交流会館の facebook
- 県庁内の広報ネット
- 娘がMC
- 法務局人権擁護課
- 法務局の広報
- 紹介
- 孫がシンポジウムに関わったので
- 法務局の勧誘

3. 今回のシンポジウムの満足度

(1) 全体として満足のいくものでしたか

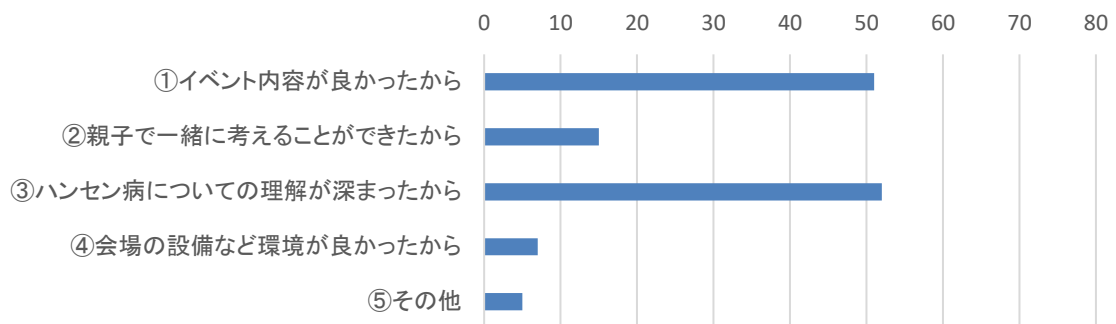
①大変満足だった	63
②まあ満足だった	18
③やや不満足だった	1
④大変不満足だった	0
合計	82

※無回答 1



(2) (1) で満足（「大変満足」「まあ満足」と回答した理由（複数回答可）

①イベント内容が良かったから	51
②親子で一緒に考えることができたから	15
③ハンセン病についての理解が深まったから	52
④会場の設備など環境が良かったから	7
⑤その他	5
合計	130



※ 「⑤その他」(自由記述)

- 時間配分がちょうどよかった。 ○ ドリアンさんの話が聞けたから
- ただ残念だったのは中高生の同世代の方々の参加をもっともっと欲しいですね
- 「あん」の役者のトークもあったのも良かった。
- 自治会長の話も伺うことができた

(3) (1) 不満足（「やや不満足」及び「大変不満足」と回答した理由（複数回答可）

①イベント内容が良くなかったから	0
②親子で一緒に考えることができなかったから	0
③ハンセン病についての理解が深まらなかったから	1
④会場の設備など環境が良くなかったから	0
⑤その他	1
合計	2

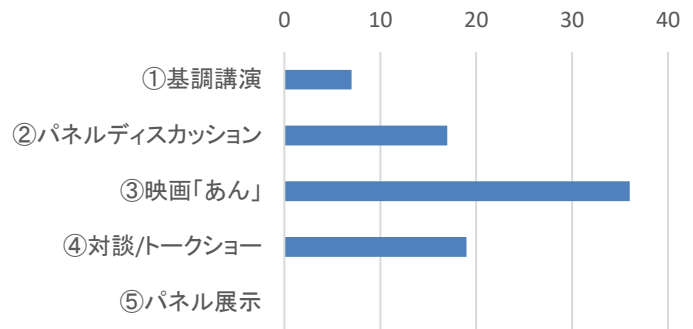
※ 「⑤その他」(自由記述)

- 映画の途中でトイレ休憩がある方が良かった

4. 特に満足したイベント

①基調講演	7
②パネルディスカッション	17
③映画「あん」	36
④対談/トークショー	19
⑤パネル展示	0
合計	79

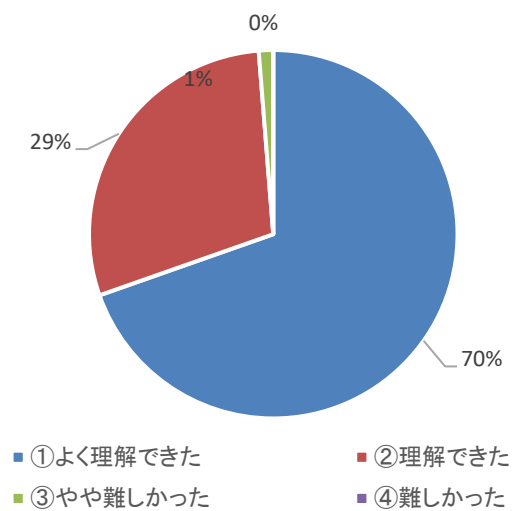
※無回答 4



5. 基調講演、パネルディスカッションの内容について

①よく理解できた	55
②理解できた	23
③やや難しかった	1
④難しかった	0
合計	79

※無回答 4



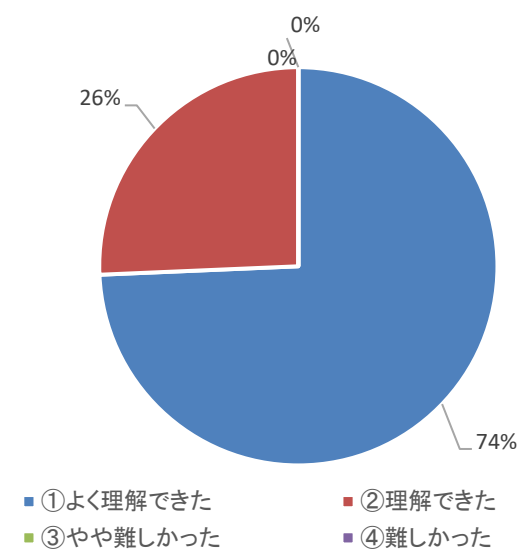
※ 自由記述

○ コーディネーターの方がパネリストの発表前に発表内容と同じ答えになる質問をしていたのが残念！

6. 映画「あん」、対談/トークショーの内容について

①よく理解できた	55
②理解できた	19
③やや難しかった	0
④難しかった	0
合計	74

※無回答 9

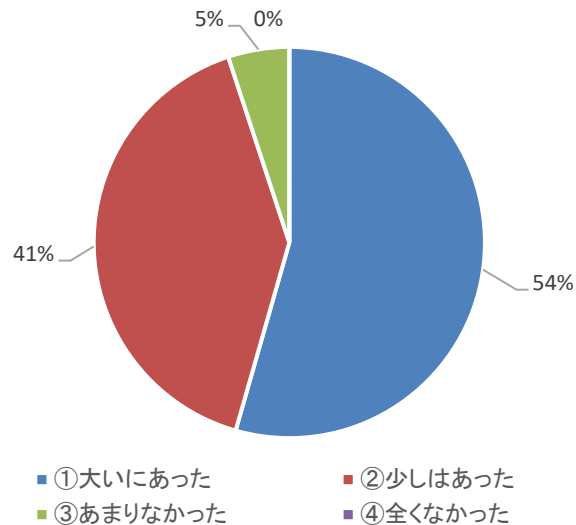


7. 今回のシンポジウム参加によるあなたの意識や行動の変化について

(1) シンポジウム参加以前のハンセン病に対する関心や理解

①大いにあった	43
②少しはあった	32
③あまりなかった	4
④全くなかった	0
合計	79

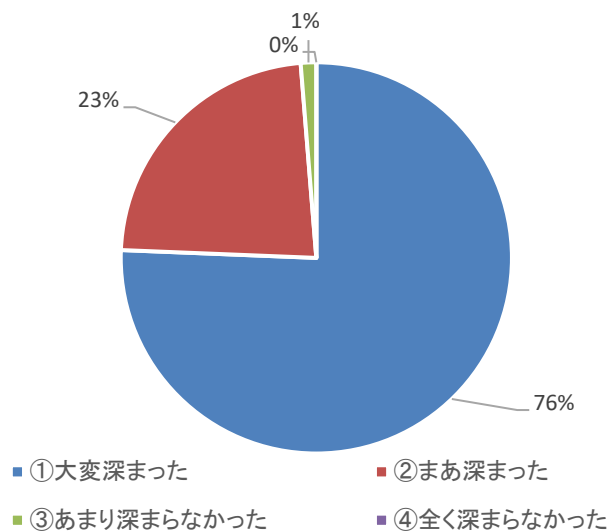
※無回答 4



(2) シンポジウムを終えての、ハンセン病への関心や理解の深まり

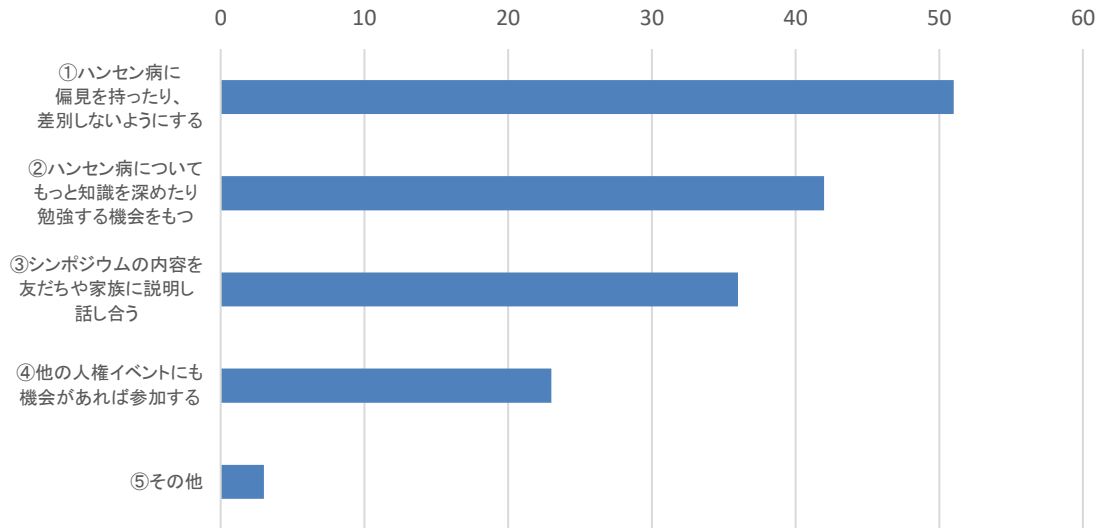
①大変深まった	59
②まあ深まった	18
③あまり深まらなかった	1
④全く深まらなかった	0
合計	78

※無回答 5



(3) シンポジウムに参加して、何か行動しようと思ったか（複数回答可）

①ハンセン病に偏見を持ったり、差別しないようにする	51
②ハンセン病についてもっと知識を深めたり勉強する機会をもつ	42
③シンポジウムの内容を友だちや家族に説明し話し合う	36
④他の人権イベントにも機会があれば参加する	23
⑤その他	3
合計	155



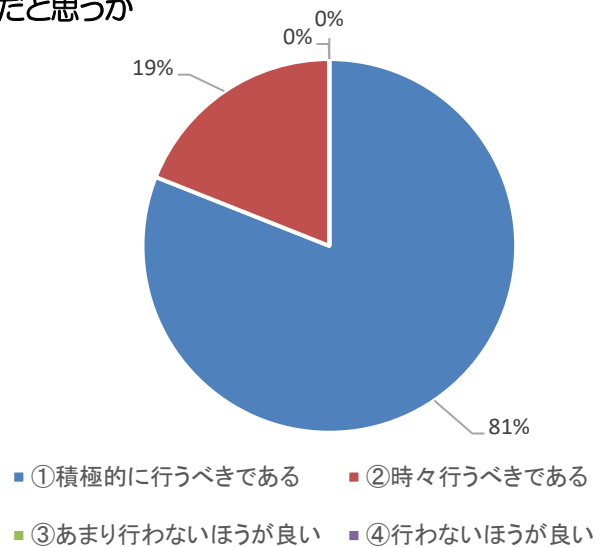
※ 「⑤その他」(自由記述)

- より深く理解し、次世代へとつないでいきたい。また多くの世代、多くの人々に知ってもらえるような活動をしたいと改めて思いました。
- 愛楽園に行こうと思った
- 愛楽園に行く回数を増やす

8. これからも、このようなシンポジウムを行うべきだと思うか

①積極的に行うべきである	64
②時々行うべきである	15
③あまり行わないほうが良い	0
④行わないほうが良い	0
合計	79

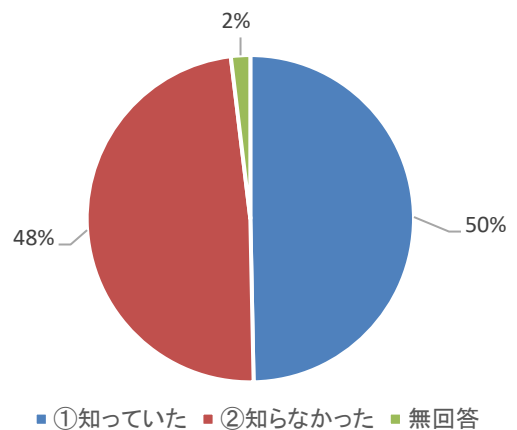
※無回答 4



9. 国の人権擁護機関(法務省・法務局・人権擁護委員)が啓発活動を行っていることを知っていたか

①知っていた	56
②知らなかった	25
合計	81

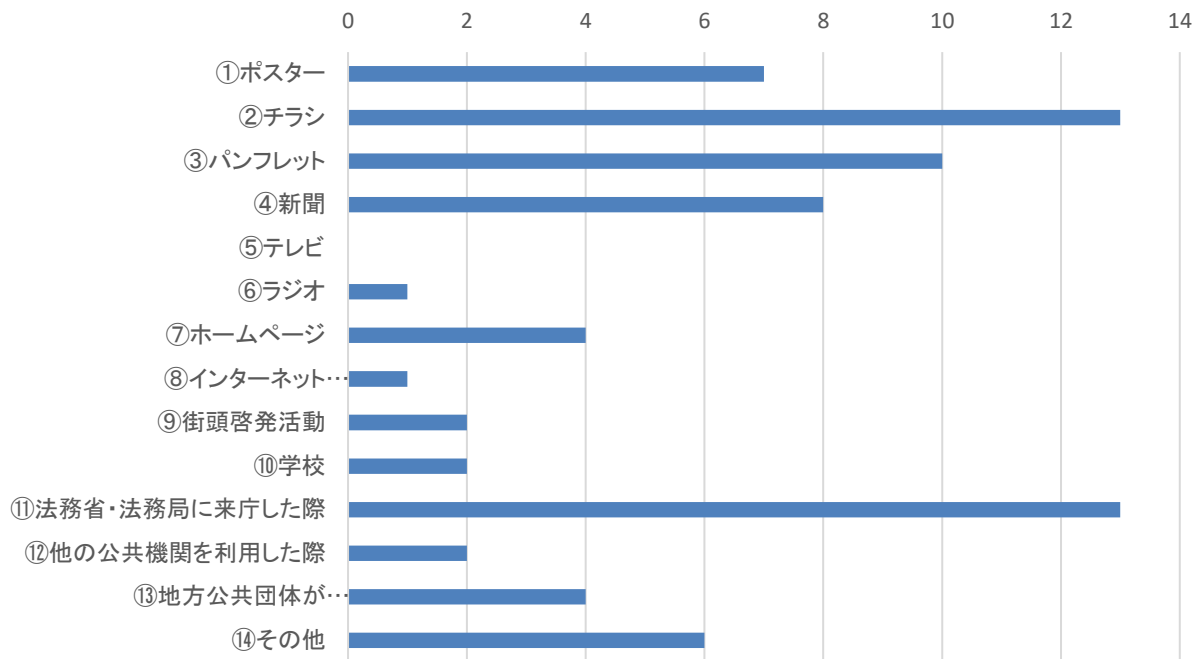
※無回答 2



10. どのようにして国の人権擁護機関（法務省・法務局・人権擁護委員）が人権啓発活動を行っていることを知ったか

①ポスター	7
②チラシ	13
③パンフレット	10
④新聞	8
⑤テレビ	0
⑥ラジオ	1
⑦ホームページ	4
⑧インターネット バナー・テキスト広告	1
⑨街頭啓発活動	2
⑩学校	2
⑪法務省・法務局に来庁した際	13
⑫他の公共機関を利用した際	2
⑬地方公共団体が発行している広報誌	4
⑭その他	6
合計	73

※無回答 10



※ 「⑭その他」(自由記述)

○ 人権擁護委員から ○ 同和問題を少しかじっていた ○ 人権擁護委員

11. 本日のシンポジウムについてご意見など（自由記述）

- トークショー大変良かった。改めて考えさせられた
- 会場や案内を中学生や高校生に参加できるように工夫したい。
- ありがとうございます。中高生が積極的に人権問題に向き合っていることに嬉しく思いました。私達大人も周りの人に目を向けて寄り添っていけたらいいなと思いました。
- 大変よかったですと思います。自分も今、年配の人80~90代のお世話をされていて色々感じた。頑張りたい。力をいただいた。
- 感動した。
- ハンセン病について、もっと関心を持つことが大切だと思い反省させられた。
- 大変 good!
- 一般的な広報では、参加者は少ないと思われるので、各学校のPTA等にも働きかけ、各学校から代表が参加してもらう工夫が必要ではないか？
- 泣けました。胸がえぐられるようでした。想像を絶する「あん」感動しました。環境、数奇な運命を辿ったハンセン病の元患者さん。生き抜いてくれてありがとう。
- パネルディスカッションの時間もう少し時間かけても良かったのではないのでしょうか
- 内容が小学生とかには難しいかな…ハンセン病施設出身の母のことで悩んでいた時、あんの小説を読んで救われました。ありがとうございます。
- パネル展が少ないように思った
- ハンセン病についての差別・偏見を若い方々にもよく知ってもらうためにも「あん」の様なすばらしい映画をこれからも作って発信して欲しいです。
- 広報が弱かったのでは。役所に行かないとポスターやちらしがないというのはどうかな？また、申し込み制だと直前に人をさそいくいです。ラジオでの広報はちゃんと聞いたのは1週間前かな。これも遅いです。国として様々な人権に目配りをしてください。沖縄のことも。定員があるのはわかりませんが、どのくらい当日の受け入れは可能だったのでしょうか。
- よかった。
- 書籍等の紹介や（販売（できれば））あれば良いと思います。自治会長だけではなく、入所されている方々の声も聞けたらと思いました。ありがとうございます。
- おつかれ様でした。大変良かったです。
- 「あん」とドリアン助川さんのお話をきいて、ハンセン病を知る、学ぶ積極的な意味がはっきりと理解できました。自分自身の生き方にも励みになりました。
- スタッフがテキパキしていいよかったです。
- 映画やシンポジウムなど、みたりきいたりしながら、考えさせる内容だったのでよかったですと思います。
- 映画「あん」を初めて観ました。講演で当事者から話を伺うことも大切ですが、映像にすることで、より深く理解することができました。ありがとうございます。
- トークショーは、分かりやすい話だった。もっと「親と子」が参加できると良かったと思う。
- ありがとうございます。
- 今回のシンポジウムを機会にこれからもっとハンセン病について知りたいと深く思った。
- 講演やディスカッションだけでなくパネル展示や映画上映など大人だけでなく、子どもにもわかりやすく伝わるように工夫されたイベントだったなと思いました。今回参加できてよかったです。また今後も自分なりに多くの方々に“ハンセン病”を知っていただけるように活動していきたいと強く思いました。
- とても良かったです。また、このような機会があれば来たいです。
- ハンセン病について、はずかしいですが、全く知識がなかったので、今回のシンポジウムに参加できて良かったです。まずは、沖縄愛楽園に見学に行こうと思います。
- とても勉強になりました。
- 手話通訳や要約筆記の準備もありすばらしいと思いました。
- 貴重な機会に感謝です。ありがとうございました。

- 生徒によるディスカッションがあるのが良かった。大人ばかりのシンポジウムでは来場しなかったであろう層が来ることができたと思います。
 - 改めて勉強になりました
 - ミドルネームや社会に出る（園外に出る）時診断書が必要であったことは、こういう場でないと（生の声）じゃないとわからないこと。もっとそういう場を拡大して行って人権差別をなくしてほしい
 - 親と子のシンポジウムで夏休みなのに人が少ないように感じた。小・中・高での学習があることは良いことだと思いました。
 - ハンセン病について（人権について）考える機会がありたまたまホームページでみつけて来ました。こんなひどい差別があった事も知らず恥ずかしい思いですが、今日知るコトができて良かったです。中1の娘と来ましたか娘にとってもよかったですと思います。ありがとうございました。
 - とっても勉強になりました。来てよかったです。ありがとうございました。浅田さん細くてきれい〜♪でした。
 - 良い時間を過ごすことができました。
 - こういう場をもっともっと数多くしてほしい。両親が当事者だけに映画「あん」は感動しました。素敵な映画でした。発表してくれた3人の学生さんには拍手！！です。
-

◆ ◇ ◆ ◇ 来場者アンケート集計② ◇ ◆ ◇ ◆

ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」那覇会場 来場者アンケート【小学生以下用】

1. あなたのことについて

(1) ねんれい (とし)

年齢	人数
9さい	1
12さい	1

(2) 住んでいるところ

①沖縄県内	2
那覇市	2

2. このシンポジウムを何で知りましたか？ (複数回答可)

①チラシ	0
②新聞	0
③テレビ	0
④ラジオ	0
⑤家族から	2
⑥知り合いから	0
⑦学校	0
⑧ホームページ	0
⑨インターネット バナー・テキスト広告	0
⑩会場で	0
⑪その他	0
回答なし	0
合計	2

3. シンポジウムの内容はどうでしたか？

①とてもよかった	2
②まあまあよかった	0
③あまりよくなかった	0
④わるかった	0
回答なし	0
合計	2

4. シンポジウムに参加して、思ったことや感じたこと、これから気を付けたいことや取り組んでみたいことなど (自由記述)

- びょうきをもつ人にもさべつしないようにしたい。

◆ ◇ ◆ ◇ 広 報 内 容 ◇ ◆ ◇ ◆

1. 事前広報

(1) 関係機関等への広報用チラシの配布

「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』那覇会場」の広報用チラシを制作、35,000部を印刷した。そして、同チラシを166か所へ送付の上、周知・広報依頼を行った。また、人権教育啓発推進センターが発行する月刊誌「アイユ」にも同封し、全国の都道府県及び市区町村などに対して周知を実施した。(デザインイメージは、P.45参照)

発送分

- a. 送付先： 「B. 後援団体」、「C. 那覇市内の中学校・高等学校」、「D. 法務局・地方法務局」、「E. 企業関係」、「F. 会場」、「G. 登壇者」、「H. 全国のハンセン病療養所等」、「I. その他」
- b. 送付時期： 2017(平成29)年6月27日(火)

「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』那覇会場」広報用チラシ配布内訳

No	送付先	1か所の部数	送付先数	部数計	備考
A. 主催及び関連団体					
1	法務省人権擁護局	150	1	150	人権擁護局=50/記者クラブ=30/広報室=20/省内がネットワーク=40/予備=10
2	厚生労働省	100	1	100	
3	沖縄地方法務局	2,000	1	2,000	本局=300/2支局=200/2サービスセンター(併付)=100/1出張所=50/人権擁護局=1,350(人権擁護委員随時配布分、予備含む)
4	人権センターが指定する場所	4,200	1	4,200	アコ同封分：4,100か所+予備：100
5	人権教育啓発推進センター	380	1	380	人権センター分(予備含む)：380
		小計	5	6,830	
B. 後援					
6	沖縄県	500	1	500	*開催地・都道府県
7	沖縄県教育委員会	200	1	200	*開催地・都道府県・教育委員会
8	那覇市市	500	1	500	*開催地・区市町村
9	那覇市教育委員会	200	1	200	*開催地・区市町村・教育委員会
10	上記以外の後援団体	30	27	810	文部科学省(都内)/名護市/名護市教育委員会/中城村/中城村教育委員会/沖縄県市長会/沖縄県町村会/沖縄タイムス社/琉球新報社/朝日新聞那覇総局/読売新聞那覇支局/毎日新聞社那覇支局/産経新聞社那覇支局/日本経済新聞社那覇支局/共同通信社那覇支局/時事通信社那覇支局/NHK沖縄放送局/RBC琉球放送/OTV沖縄テレビ放送/QAB琉球毎日放送/OCN沖縄ケーブルネットワーク/エフエム沖縄/ラジオ沖縄/fm那覇(那覇)/FMLEキオ(那覇)/FMやんばる(名護)/おきなわ倶楽部/
		小計	31	2,210	
C. 那覇市の中・高等学校					
11	那覇市の中学校(18校) + 高等学校(13校)	—	34	23,540	【那覇市立中学校】安海中学校/首里中学校/真和志中学校/石田中学校/那覇中学校/上山中学校/神奈中学校/高宮中学校/古蔵中学校/小嶽中学校/松島中学校/城北中学校/城北(若狭分校)中学校/鏡原中学校/松城中学校/仲井真中学校/金城中学校/石嶺中学校/

					【沖縄県立高等学校】 那覇国際高等学校／首里高等学校／首里東高等学校／那覇高等学校／真和志高等学校／小嶺高等学校／那覇西高等学校／沖縄工業高等学校／那覇商業高等学校／那覇商業高等学校（定時）／泊高等学校（定時） 【私立高等学校】 沖縄尚学高等学校／興南高等学校 【登壇中学・高校】 名護市久辺中学校（名護市）／中城村立中学校（中城村）／沖縄カトリック中学高等学校（宜野湾市）
		小計	31	23,540	

D. 法務局・地方法務局

14	全国の法務局・地方法務局	20	49	980	50-1（那覇地方法務局を除く）=49カ所
		小計	49	980	

E. 企業関係

16	全国の人企連	15	13	195	千葉、埼玉、滋賀、大阪、京都、兵庫、広島、香川、福岡、長野、鳥取、愛知、東京
		小計	13	195	

F. 会場

17	男女共同参画センター・てい るる	40	1	40	那覇市内
		小計	1	40	

J. 登壇者

18	国立療養所沖縄愛楽園	100	1	100	那覇市内
19	同 入所者自治会	200	1	200	※入所者数：169人（2016年現在）＋予備
20	中学生、高校生	25	3	75	宜野湾市内×1、名護市内×1、中城村×1
21	対談（トーク）登壇者	25	2	50	
		小計	7	425	

K. 全国のハンセン病療養所等

22	国立ハンセン病療養所	20	11	220	青森、宮城、群馬、東京、静岡、岡山×2、香川×1、熊本、鹿児島
23	同 入所者自治会	20	11	220	×2（鹿屋、奄美） ※沖縄愛楽園と宮古南園を除く。
24	国立ハンセン病資料館	20	1	20	東京（東村山）
25	国立療養所宮古南静園	120	1	120	※会場である沖縄県宮古市にある療養所
26	国立療養所宮古南静園入所 者自治会	120	1	120	※会場である沖縄県宮古市にある療養所
		小計	25	700	

L. その他

25	映画配給会社	30	1	30	※映画「あん」配給会社／都内
		小計	1	30	

総計	166	34,950
	カ所	部

(2) ウェブサイトへの広報記事掲載

- ① 人権センター・ウェブサイトのイベント情報コーナーに開催情報を掲載
※ 参考： <http://www.jinken.or.jp>
- ② 人権ライブラリー・ウェブサイトのイベント情報コーナーに開催情報を掲載
※ 参考： <http://www.jinken-library.jp>
- ③ インターネット上のイベント情報サイトに広報記事を投稿、掲載
※ 全国イベントガイド、イベスタなど計 10 サイトに掲載

(3) メールマガジンの配信

本シンポジウムの開催を案内するメールマガジンを計 3 回配信

2. 実施内容の周知

来場できなかった多くの人々にも啓発の促進を図るため、シンポジウムの実施内容について、以下の各種媒体を活用し実施内容を周知した。

(1) 「採録記事」広報 ※エリア 全国紙

- ① 読売KODOMO新聞
掲載日： 平成 29 (2017) 年 10 月 19 日 (木)
判型等： 1 ページ広告 / タブロイド版・全頁カラー
部数： 192,468 部
- ② 読売中高生新聞
掲載日： 平成 29 (2017) 年 9 月 29 日 (金)
判型等： 1 ページ広告 / タブロイド版・全頁カラー
部数： 72,613 部
- ③ 朝日小学生新聞
掲載日： 平成 29 (2017) 年 9 月 28 日 (木)
判型等： 1 ページ広告 / タブロイド版・全頁カラー
部数： 111,353 部
- ④ 毎日小学生新聞
掲載日： 平成 29 (2017) 年 9 月 29 日 (金)
判型等： 1 ページ広告 / タブロイド版・全頁カラー
部数： 99,000 部

※ 紙面イメージは、P.47~P.49 参照

(2) 沖縄県内の全中学校への広報

- ① 読売中高生新聞
掲載日： 平成 29 (2017) 年 10 月 17 日 (火)
判型等： 1 ページ広告 / タブロイド版・全頁カラー
配布学校数： 156 校

(3) 採録記事 配信（メディアリリース）

新聞、テレビ、インターネットサイトの各メディアに対し、採録記事と同内容の情報を配信し、掲載依頼。

特別Web ページ

配信日：平成29（2017）年9月28日（木）

バナー広告

配信日：平成29（2017）年9月29日（金）

リリース配信

※全国紙・通信社系、ビジネス系、大手ポータルサイト学生向けメディアなど

配信先数：約170カ所

毎日新聞 「Newsがわかる」

掲載日：平成29（2017）年11月号

(4) 動画共有サイトYouTube「人権チャンネル」に撮影動画を掲載

○ YouTube 「人権チャンネル」

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

① 開会～主催者代表～基調講演：金城雅春さん（30分56秒）

<https://youtu.be/irE82gKErU>

② パネルディスカッション（38分20秒）

<https://youtu.be/OaOIRkYaxNU>

③ 対談／トークショー：ドリアン助川さん&浅田美代子さん（26分56秒）

<https://youtu.be/eNput9a-qlc>

※平成29（2017）年10月20日（金）掲載



① 開会～主催者代表～基調講演：金城雅春さん



② パネルディスカッション



③ 対談／トークショー：ドリアン助川さん&樹木希林さん

◆ ◆ ◆ ◆ 関連資料等 ◆ ◆ ◆ ◆

1. 広報用チラシ



表面



裏面

○ 判型等： A4 / カラー（表面） ・ モノクロ（裏面） ○ 印刷部数： 35,000部
 ※ 配布先等は、P.41 参照

2. 来場者向け配布資料

(1) 角2封筒に封入・配布 (343セット作成)

- ① プログラム (A4・モノクロ)
- ② アンケート (「中学生以上・大人用」と「小学生以下用」)
- ③ 沖縄愛楽園案内図 (A4)
- ④ 沖縄愛楽園交流会館パンフレット (A4/3つ折り)
- ⑤ 宮古南静園パンフレット (A4/3つ折り)
- ⑥ 宮古南静園人権啓発交流センター (A4)
- ⑦ ハンセン病の向こう側 パンフレット (A4/8頁)
 ※厚生労働省 ハンセン病資料館提供
- ⑧ キミは知っているかい?ハンセン病のこと。 パンフレット (A4/8頁/4つ折り)
 ※ハンセン病資料館提供
- ⑨ 第36回(平成28年度)全国中学生人権作文コンテスト入賞作文集 (A5)
 ※法務省 提供
- ⑩ みんなともだち~マンガで考える「人権」~ (A5) ※那覇地方法務局 提供
- ⑪ 「いじめ」しない させない 見逃さない (A5) ※那覇地方法務局 提供
- ⑫ SOS ミニター (中学生用) ※那覇地方法務局 提供
- ⑬ 「未来を拓く5つの扉 ~全国中学生人権作文コンテスト入賞作品朗読集~」チラシ (A4)

- ⑭ 「わたしたちが伝えたい、大切なことーアニメで見る 全国中学生作文コンテスト入賞作品ー」
チラシ (A4)
- ⑮ 人権ライブラリーのごあんない (A4・三つ折り・リーフレット)
- ⑯ 人権センターのごあんない (A4・三つ折り・リーフレット)
- ⑰ アイユ・8月号
- ⑱ カタログ「人権啓発資料のごあんない」(A4・24P)

3. 新聞採録

(1)「採録記事」広報 ※エリア 全国紙

- ① 読売KODOMO新聞
掲載日：平成29(2017)年10月19日(木)
判型等：1ページ広告/タブロイド版・全頁カラー
部数：192,468部
- ② 読売中高生新聞
掲載日：平成29(2017)年9月29日(金)
判型等：1ページ広告/タブロイド版・全頁カラー
部数：72,613部
- ③ 朝日小学生新聞
掲載日：平成29(2017)年9月28日(木)
判型等：1ページ広告/タブロイド版・全頁カラー
部数：111,353部
- ④ 毎日小学生新聞
掲載日：平成29(2017)年9月29日(金)
判型等：1ページ広告/タブロイド版・全頁カラー
部数：99,000部

※ 紙面イメージは、P.55 及び P.56 参照

(2) 沖縄県内の全中学校への広報

- ① 読売中高生新聞
掲載日：平成29(2017)年10月17日(火)
判型等：1ページ広告/タブロイド版・全頁カラー
配布学校数：156校

新聞採録 / 紙面イメージ

● 読売KODOMO新聞 ※ 平成29(2017)年10月19日(木)掲載

広告

ハンセン病とは?

ハンセン病は「らい菌」という細菌に感染することで起こる病気。手足の指先の神経が麻痺したり、皮膚が変形したりすることがある。でも、らい菌の感染力はとて



司会を務めた比嘉光悠さん(名護市立久辺中学校2年)

ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」 正しい知識と行動で共に生きる社会の実現を

身近に潜む偏見

中城村立中城中学校2年 棚原未央さん ハンセン病患者・回復者だけでなく、家族も差別をされたことにショックを受けました。

語り継ぐ人の育成を目指す

金城雅春さん ハンセン病問題を語り継いでいく人々を育てることが必要です。沖縄愛楽園では、園内ボランティアガイドの養成講座を開いています。

風化を防ぐために

名護市立久辺中学校2年 久志顕介さん ハンセン病問題は、決して風化させてはなりません。社会全体で反省して次世代に真実を伝え、「受け入れる社会」づくりをしていくべきです。

関心を持つことから

国立療養所沖縄愛楽園園長 野村謙さん ハンセン病療養所の入所者は家族に迷惑がかからないよう、本名とは別の「園名」を名乗りました。皆さんは、まず関心を持つことから始めてください。

“最後の世代”の使命

沖縄カトリック高等学校2年 渡久地礼李さん 私たちは当事者の話を聞ける最後の世代。未だ残る差別や偏見をなくすために、ハンセン病回復者の方と交流を持ち、療養所や資料館を訪れたいです。

あらゆる差別の解消へ

公益財団法人人権教育啓発推進センター 理事長 横田洋二さん ハンセン病問題を正しく理解して、行動に移すことはもちろん、それをきっかけにしてあらゆる差別について考えることも重要です。

沖縄愛楽園の歴史に学ぶ 基調講演 国立療養所沖縄愛楽園自治会会長 金城雅春さん

映画「あんな上映 トークショー」 人間が生きる意味とは 女優 浅田美代子さん 作家、詩の道化師 ドリアン助川さん

知っていますか? 「子どもの人権110番」 いじめや体罰などの困りごと、ひとりで悩まないで相談してください。

子どもの人権110番 (通話料無料) ぜろ ぜろ なな の ひやく とお ばん

☎ 0120-007-110

「インターネット人権相談」 インターネットでも人権の相談を受け付けています

パソコン http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken113.html ケータイ http://www.moj.go.jp/k/SOUDAN/JINKEN/index_k15.html

外国人のための人権相談: http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken21.html 法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

人権アーカイブ・シリーズ 分かりやすくまとめた映像で、ハンセン病をきちんと知ろう

「ハンセン病問題」～過去からの証言、未来への提言～ ハンセン病問題の歴史的な経緯や時代ごとの社会情勢、問題の本質などについて、関係者の証言や解説をもとに分かりやすくまとめた映像。幅広い世代が学びを得られます。

「家族で考えるハンセン病」 実際のハンセン病問題の関係者も登場するドラマ作品。中学1年生の清香が友だちと療養所を訪れるなどして、ハンセン病問題や人権の大切さについて理解していきます。

新聞採録 / 紙面イメージ

●読売中高生新聞 ※平成29(2017)年9月29日(金)掲載



正しい知識と行動で「共に生きる」社会の実現を

日本には「ハンセン病」の患者や回復者、その家族が、誤った認識による偏見により、長い間差別を受けてきた歴史があります。そんなハンセン病について親子で正しく理解するためのシンポジウムが、8月26日に沖縄県那覇市で開催されました。プログラムは、ハンセン病回復者による講演や、地元の中高生が参加するパネルディスカッション、映画の上演など。参加者は、ハンセン病を取り巻く問題を考えるとともに、幅広い人権を尊重する大切さを学びました。



司会を務めた
比嘉 光悠 さん
(名護市立久辺中学校2年)

ハンセン病とは

ハンセン病は「らい菌」という細菌に感染することで起こる病気です。手足の指先の神経が麻痺したり、皮膚が変形したりすることがあります。しかし、らい菌の感染力は極めて弱く、感染しても発病することはほとんどありません。発病しても適切な治療を受ければ治ります。

基調講演 沖縄愛楽園の歴史に学ぶ



国立療養所沖縄愛楽園自治会
会長
金城 雅春 さん

ハンセン病患者の強制隔離を定める法律が日本で最初に制定されたのは、

明治40年。沖縄では当初、地域住民の反対によって療養所をつくることさえ許されず、患者は無人島に逃げ込むなどして暮らしていたそうです。昭和13年に国頭愛楽園(現在の沖縄愛楽園)が開園しますが、入所者は家族と面会することもままならず、強制的に収容されました。戦後におけるアメリカ統治下の琉球政府では、本土とは違って限定的な

退所や在宅治療が認められており、この規定は特別処置として本土復帰後も継続されました。しかし、療養所内で人権を無視した行為が平然と行われ続けていたことも事実です。明治の法律がさらに強化された「らい予防法」が廃止されたのは、平成8年のことでした。皆さんには、こうした歴史をより多くの人へ伝えてほしいと思います。

映画「あん」上映/トークショー “人間が生きる意味”とは

どら焼き店の雇われ店長と求人募集の張り紙を見てやってきたハンセン病回復者の出会いから別

れまでを描いた映画「あん」を鑑賞。上映後のトークショーでは、原作者のドリアン助川さんが人間が生

きる意味を問うために小説を執筆したことを明かしました。また、ハンセン病回復者との交流を通じて「悲しみや苦しみの中でも、人間は底知れぬ力を発揮できることを知った」というエピソードも披露。ハンセン病に対して少なからず偏見を持つどら焼き店のオーナーを演じた浅田美代子さんは「悪意がなく、自然に偏見を持つ人がたくさんいるのかもしれない」と警鐘を鳴らしました。



女優 浅田 美代子 さん 作家、詩の進化師 ドリアン助川 さん

●このシンポジウムの模様は、動画共有サイトYouTubeの【人権チャンネル】でご覧いただけます。
<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

幅広い世代と立場からハンセン病問題を考える

パネルディスカッション いま私たちにできること

<パネリスト>

身近に潜む偏見
中城村立中城中学校2年
棚原 未央 さん



親族がハンセン病回復者だったため、この問題に興味を持ちました。特に残酷だと思ったのは、子どもを産ませないように断種(不妊手術)や堕胎が行われたことです。世界では偏見によって多くの人権が奪われています。すべての人が自分らしくいられるよう、身近な人権侵害から止めていきます。

風化を防ぐために
名護市立久辺中学校2年
久志 顕介 さん



国の誤った政策と一般市民の認識によってハンセン病患者・回復者の人権が侵害された事実を、決して風化させてはなりません。社会全体で反省して次世代に伝え、“受け入れる社会”づくりをしていくべきです。そうすることで、回復者の方々が負った心の傷を癒すことにつながると信じています。

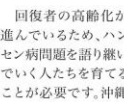
“最後の世代”の使命
沖縄カトリック高等学校2年
渡久地 礼季 さん



あるハンセン病回復者の方は、なかなか退所できず、納骨堂まである療養所のことを「入口はあっても出口はない」と言いました。私たちは当事者の話を聞ける最後の世代。未だ残る差別や偏見を取り除くためにも、回復者の方と交流を持ち、各地の療養所や資料館を訪ねたいです。

<コメンテーター>

語り部の育成を目指す
金城 雅春 さん



回復者の高齢化が進んでいるため、ハンセン病問題を語り継いでいく人々を育てることが必要です。沖縄愛楽園では、園内ボランティアガイドの養成講座を開いているので、ぜひ参加してください。

関心を持つことから
国立療養所沖縄愛楽園園長
野村 謙 さん



ハンセン病療養所の入所者は家族に迷惑がゆかりないよう、本名とは別の「園名」を名乗り、園外のことを「社会」と呼んできました。まずは、関心を持つことがスタート、このシンポジウムを機会に理解を深めましょう。

<コーディネーター>

あらゆる差別の解消へ
公益財団法人人権教育推進センター理事長
横田 洋三 さん



若い人たちの「未来を明るくしよう」という気持ちに勇気づけられました。ハンセン病問題を正しく理解して、行動に移すことはもちろん、それをきっかけにしてあらゆる差別について考えることも重要です。

知っていますか? 「子どもの人権110番」
いじめや体罰などの困りごと、ひとりで悩まないで相談してください。

子どもの人権 110番

(通話料無料) ぜろ ぜろ な の ひゃく と お ばん

0120-007-110

「インターネット人権相談」

インターネットでも人権の相談を受け付けています

パソコン <http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken113.html>

ケータイ http://www.moj.go.jp/k/SOUDAN/JINKEN/index_k15.html

外国人のための人権相談:<http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken21.html>

- 法務省人権擁護局ホームページ <http://www.moj.go.jp/jinken>
- 人権啓発活動ネットワーク協議会ホームページ <http://www.moj.go.jp/jinkennet>
- YouTube 法務省チャンネル <https://www.youtube.com/MOJchannel>
- YouTube 人権チャンネル <https://www.youtube.com/jinkenchannel>
- 人権ライブラリー <http://www.jinken-library.jp>

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会



人権アーカイブ・シリーズ 分かりやすくまとめた映像で、 ハンセン病をきちんと知ろう

「ハンセン病問題」～過去からの証言、未来への提言～



<https://youtu.be/eRKCmf-kc5w>

ハンセン病問題の歴史的な経緯や時代ごとの社会情勢、問題の本質などについて、関係者の証言や解説をもとに分かりやすくまとめた映像。幅広い世代が学びを得られます。

「家族で考えるハンセン病」



<https://youtu.be/cRCAIDCC3hs>

実際のハンセン病問題の関係者も登場するドラマ作品。中学1年生の清香が友だちと療養所を訪れるなどして、ハンセン病問題や人権の大切さについて理解していきます。

新聞採録 / 紙面イメージ

●朝日小学生新聞 ※平成29(2017)年9月28日(木)掲載

広告

正しい知識と行動で共に生きる社会の実現を

ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」那覇会場

世代と立場を超えてハンセン病問題を考える

日本には「ハンセン病」の患者や回復者、その家族が誤った認識による偏見により、長い間差別を受けてきた歴史があるんだ。そんなハンセン病について親子で正しく理解するためのシンポジウムが、8月26日に沖縄県那覇市で開催されたよ。

司会を務めた比嘉光悠さん(名護市立久辺中学校2年)

ハンセン病とは?

ハンセン病は「らい菌」という細菌に感染することで起こる病気。手足の指先の神経が麻痺したり、皮膚が変形したりすることがあるんだ。でも、らい菌の感染力はとても弱く、感染しても発病することはほとんどないよ。発病しても適切な治療を受ければ治るんだ。

基調講演

繰り返された人権侵害

金城雅春さん
国立療養所沖縄愛楽園自治会 会長

ハンセン病患者を一般の人と離れて生活させることを定めた法律が制定されたのは、明治40年。戦後以降の沖縄では、本土とは違い限定的な返還や在宅治療が認められたものの、療養所内で人権侵害が繰り返されたことも事実です。平成8年に、明治の法律が強化された「らい予防法」がようやく廃止されました。皆さんには、こうした歴史をより多くの人へ伝えてほしいと思います。

パネルディスカッション

パネルディスカッションには、地元の中高生のほか、金城さん、野村謙さん(国立療養所沖縄愛楽園園長)、横田洋三さん(公財財団法人人権教育啓発推進センター理事長)も参加。来場した親子やボランティアも話し合い、ハンセン病問題について考えることの大切さを伝えました。

身近に潜む偏見

中城立中中学校2年 榎原未央さん

ハンセン病患者、回復者だけでなく、家族もひどい差別をされたことにショックを受けました。誰かが自分らしくいられるよう、身近な人権侵害から止めていきます。

風化を防ぐために

久志顕介さん
名護市立久辺中学校2年

ハンセン病問題は、決して風化させてはなりません。社会全体で反省し、次世代に真実を伝え、受け入れる社会づくりをしていきます。

最後の世代の使命

沖繩カトリック高等学校2年 渡久地礼季さん

私たちは当事者の話を聞ける最後の世代。未だ残る差別や偏見をなくすために、ハンセン病回復者の方と交流を持ち、療養所や資料館を訪れたいです。

映画「あんな上映トークショー」

人間が生きている意味とは

作家・詩人の権化師、トリアン助川さん
女優 浅田美代子さん

どら焼き店の雇われ店長と求人募集の張り紙を見てやってきたハンセン病回復者の出会いから別れまでを描いた映画「あんな」を鑑賞したトークショーでは、原作者のトリアン助川さんと出演者の浅田美代子さんが「人間が生きている意味」などに関して語り合ったんだ。

インターネットでも人権の相談を受け付けています。
インターネット人権相談 検索

子どもの人権110番 ☎ 0120-007-110

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

●毎日小学生新聞 ※平成29(2017)年9月29日(金)掲載

広告

正しい知識と行動で共に生きる社会の実現を

ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」那覇会場

世代と立場を超えてハンセン病問題を考える

日本には「ハンセン病」の患者や回復者、その家族が、誤った認識による偏見により、長い間差別を受けてきた歴史があるんだ。そんなハンセン病について親子で正しく理解するためのシンポジウムが、8月26日に沖縄県那覇市で開催されたよ。

司会を務めた比嘉光悠さん(名護市立久辺中学校2年)

ハンセン病とは?

ハンセン病は「らい菌」という細菌に感染することで起こる病気。手足の指先の神経が麻痺したり、皮膚が変形したりすることがあるんだ。でも、らい菌の感染力はとても弱く、感染しても発病することはほとんどないよ。発病しても適切な治療を受ければ治るんだ。

基調講演

繰り返された人権侵害

金城雅春さん
国立療養所沖縄愛楽園自治会 会長

ハンセン病患者を一般の人と離れて生活させることを定めた法律が制定されたのは、明治40年。戦後以降の沖縄では、本土とは違い限定的な返還や在宅治療が認められたものの、療養所内で人権侵害が繰り返されたことも事実です。平成8年に、明治の法律が強化された「らい予防法」がようやく廃止されました。皆さんには、こうした歴史をより多くの人へ伝えてほしいと思います。

パネルディスカッション

パネルディスカッションには、地元の中高生のほか、金城さん、野村謙さん(国立療養所沖縄愛楽園園長)、横田洋三さん(人権教育啓発推進センター理事長)も参加し、意見を交わし合いました。

身近に潜む偏見

中城立中中学校2年 榎原未央さん

ハンセン病患者、回復者だけでなく、家族もひどい差別をされたことにショックを受けました。誰もが自分らしくいられるよう、身近な人権侵害から止めていきます。

風化を防ぐために

久志顕介さん
名護市立久辺中学校2年

ハンセン病問題は、決して風化させてはなりません。社会全体で反省して次世代に真実を伝え、受け入れる社会づくりをしていくべきです。

最後の世代の使命

沖繩カトリック高等学校2年 渡久地礼季さん

私たちは当事者の話を聞ける最後の世代。未だ残る差別や偏見をなくすために、ハンセン病回復者の方と交流を持ち、療養所や資料館を訪れたいです。

映画「あんな上映トークショー」

人間が生きている意味とは

作家・詩人の権化師、トリアン助川さん
女優 浅田美代子さん

どら焼き店の雇われ店長と求人募集の張り紙を見てやってきたハンセン病回復者の出会いから別れまでを描いた映画「あんな」を鑑賞したトークショーでは、原作者のトリアン助川さんと出演者の浅田美代子さんが「人間が生きている意味」などに関して語り合ったんだ。

インターネットでも人権の相談を受け付けています。
インターネット人権相談 検索

子どもの人権110番 ☎ 0120-007-110

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

◆ ◇ ◆ ◇ 採録記事に関する反応（参考） ◇ ◆ ◇ ◆

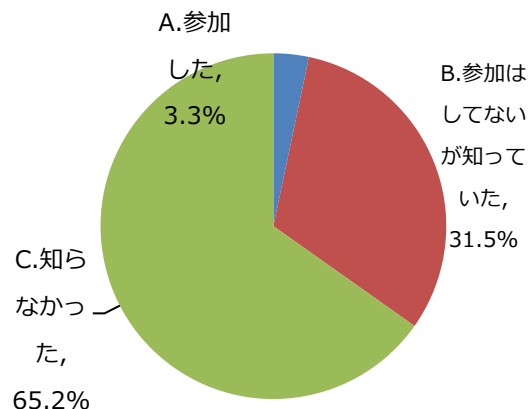
●調査対象： 名護市立久辺中学校、中城村中城中学校、沖縄カトリック高等学校の生徒・計93名
 ※ 久辺中学校：27名 / 中城中学校：33名 / 沖縄カトリック高等学校：33名

●調査時期： 平成29（2017）年11月末

1. あなたは、8月26日（土）沖縄県男女共同参画センター・ていりるで「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』」が開催されたことをご存じでしたか？あてはまるもの一つお選びください。

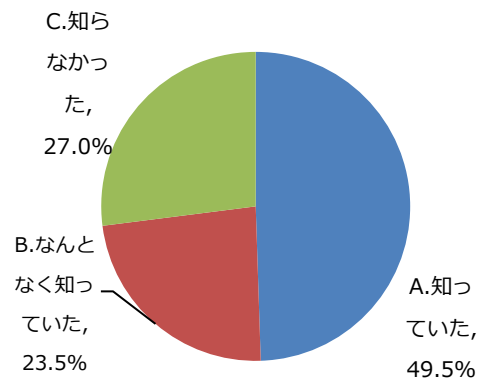
		合計	%
①	A.参加した	3	3.3%
	B.参加はしてないが知っていた	29	31.5%
	C.知らなかった	60	65.2%

※無回答 1



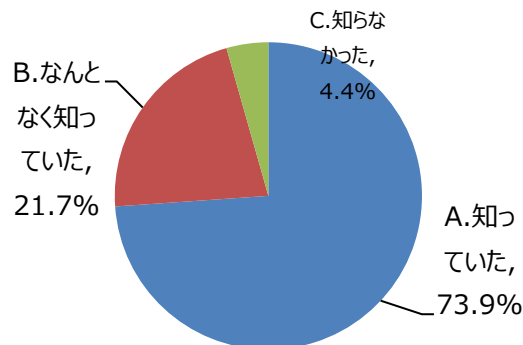
2. あなたは、この紙面を見る前に、「ハンセン病」をご存知でしたか？あてはまるもの一つお選びください。

		合計	%
②	A.知っていた	46	49.5%
	B.なんとなく知っていた	22	23.5%
	C.知らなかった	25	27.0%



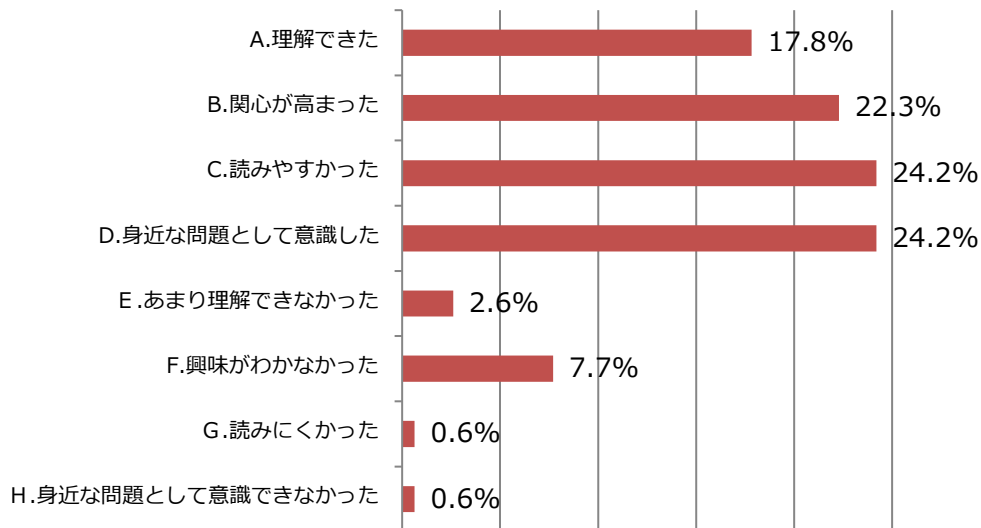
3. 「2」の質問で、「知っていた」と答えた方に質問します。あなたはハンセン病患者が隔離政策をとられ、全国各地の療養所に長年にわたり収容されていたことをご存知でしたか？あてはまるもの一つお選びください。

		合計	%
③	A.知っていた	34	73.9%
	B.なんとなく知っていた	10	21.7%
	C.知らなかった	2	4.4%



4. あなたは、この紙面（記事・広告）をご覧になって、どのような印象をお持ちになりましたか。
あてはまるものすべてお選びください。

		合計	%
④	A.理解できた	28	17.8%
	B.関心が高まった	35	22.3%
	C.読みやすかった	38	24.2%
	D.身近な問題として意識した	38	24.2%
	E.あまり理解できなかった	4	2.5%
	F.興味がわかなかった	12	7.6%
	G.読みにくかった	1	0.6%
	H.身近な問題として意識できなかった	1	0.6%



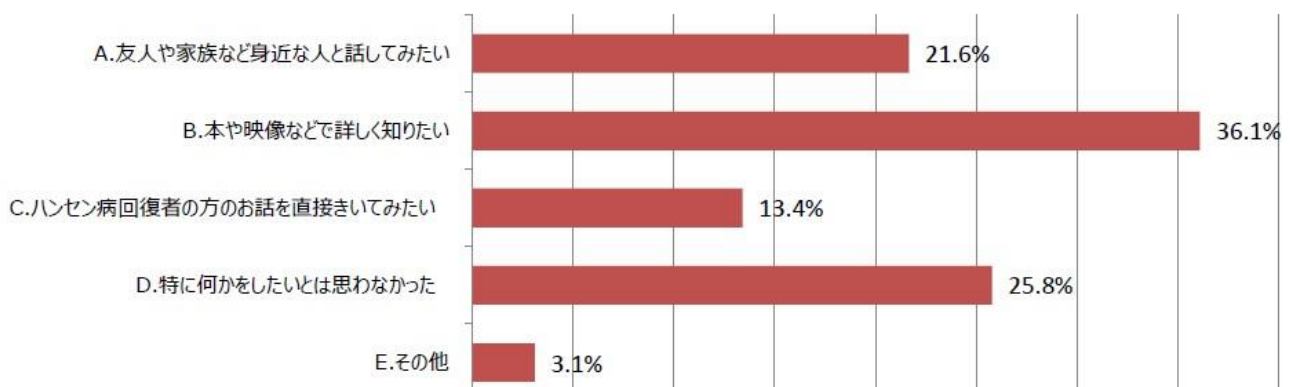
5. あなたが、この紙面をご覧になって理解できた事項はどれですか。あてはまるものすべてお選びください。

		合計	%
⑤	A.ハンセン病患者は周囲の誤った知識や思い込みで偏見を持たれ、差別を受けてきたこと	72	34.6%
	B.ハンセン病患者は「らい予防法」などの誤った政策により強制隔離されていたこと	33	15.9%
	C.ハンセン病は非常に感染力が弱く感染しても発病することはほとんどないこと	42	20.2%
	D.ハンセン病問題を考えることを通じて偏見・差別をなくすべきだということ	61	29.3%



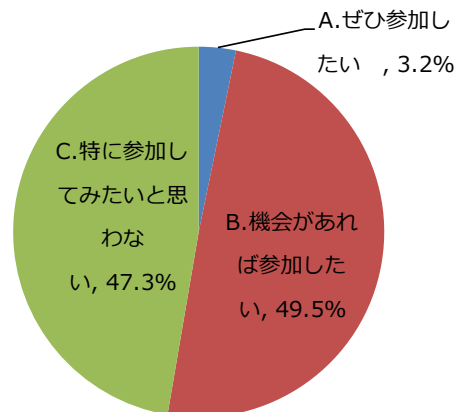
6. この紙面をご覧になって、何か行動を起こしたいと思いましたか？あてはまるものすべてお選びください。

		合計	%
⑥	A.友人や家族など身近な人と話してみたい	21	21.6%
	B.本や映像などで詳しく知りたい	35	36.1%
	C.ハンセン病回復者の方のお話を直接きいてみたい	13	13.4%
	D.特に何かをしたいとは思わなかった	25	25.8%
	E.その他	3	3.1%



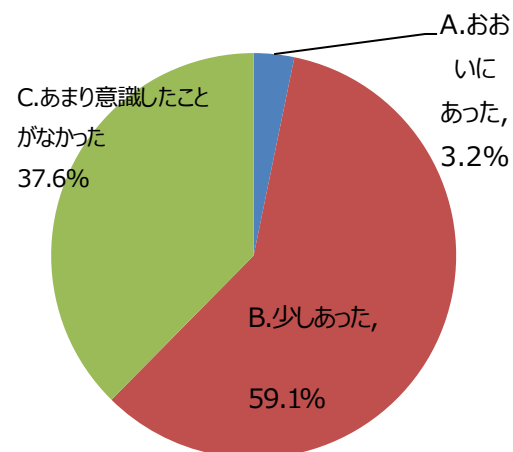
7. あなたは、今後ハンセン病シンポジウムが開催されたら参加したいと思いますか？あてはまるもの一つお選びください。

		合計	%
⑦	A.ぜひ参加したい	3	3.2%
	B.機会があれば参加したい	46	49.5%
	C.特に参加してみたいと思わない	44	47.3%



8. あなたは、この紙面（記事・広告）をご覧になる前に人権問題についてどのくらい関心や理解がありましたか。

		合計	%
⑧	A.おおいにあった	3	3.2%
	B.少しあった	55	59.1%
	C.あまり意識したことがなかった	35	37.6%



※無回答 3

9. この紙面をご覧になった感想をご自由にお書きください。

- この紙面を見てみて、僕は絶対に差別をしてはいけません。なぜなら人としての自由をうばわれ、生きることに制限をされてしまうからです。そして、差別が一度始まってしまうと、広がっていき連鎖して人々に苦しみを与えつづけていくからです。この紙面を読んで、絶対に他の人が病気でも差別しないと改めて思いました。
- ハンセン病は人にうつるけどすぐになおります。だけど、あんなにひどいかわりはしなくていいと思った。
- 沖縄愛楽園に行き、ハンセン病かららい病によって差別を受けたり、らい病防法などの誤った政策で強制隔離されたことを知って、「自分だったら」と考え感じました。家族と離れて、面会もできず、さびしい気持ちになります。そんなことを思うことが、当時の人にできなかったと考えました。僕は人

を差別したりはしないので、もしかすると、かんじゃの方々の気持ちはわからないかもしれません。しかし「差別」のことを注目したら、人権のことに違反してるから、自分は、差別のことを分からないのではなく、分かっていなかったと思いました。僕は、「差別」「ハンセン病」「強制隔離」この三つのキーワードに注目していきたいです。

- 一年生の時に、ハンセン病について勉強して愛楽園にも行っていたのである程度のことは知っていましたが、この記事を読んで、もっと深く考えてみようと思いました。
- この病気はうつらないとわかりました。
- 自分達が思っている以上に、ハンセン病回復者さん達は、差別などを受けていたので、その事実をしっかり受けとめて、身近な人や出来事から少しずつ意識していきたいです。
- 私達久辺中2年生は、一年生のときに愛楽園に行ったことがあって、隔離されていたことや、あやまった情報が流れていることは知っていましたが、私達はそこまで行動にうつしたりはしませんでした。でも、この紙面をよんで元らい病患者の方の会ってみたいと思いました。
- 1年生のとき、総合の勉強で、ハンセン病のことを学びました。ハンセン病はとてもざんこくだと思いました。
- 身近にハンセン病や人権問題に対するシンポジウムが開かれていることも驚いたが、中学校の生徒さんがパネルディスカッションしているのはすごいと思った。この子達から未来の人権問題を直視して解決してほしいと切に願います。
- ハンセン病の患者が一般市民の認識によって差別を受けていたのはだめなことで、これからの人権問題もこれを機会によくなっていったらいいと思う。
- 人々のかん違いによりハンセン病患者（ハンセン回復者）達は、感染力が極めて弱いのに差別され続けても生きたいという強い希望を持ち、今を生き続けている人達がいるなら私はすごいなと思いました、ハンセン病の事について更に知りたいと思いました。
- やっぱり差別して罪のない人たちをかくりするのはだめだと思う。
- ハンセン病だった人たちがもう差別されなければいいなと思った
- ハンセン病は、とても差別を受けてきたものと知って、何でだろう？と疑問に思いました。
- ハンセン病とはあまりかんせんなどしくいのに、壁でハンセン病患者と一般市民を分けていてとてもざんこくだなと思いました。
- ハンセン病は、「らい菌」という細菌に感染することで起こる病気ということを改めて知った。
- とってもかわいそうだなと思いました。
- さべつはいけないと思った。
- 昔の人々は変な病気にかかると、すぐ差別したりしているので、ちゃんと患者の気持ちを考えて行動してほしいと思いました。今でも後遺症がある人もいると思うけど、ハンセン病という病気には、か

かっていないので、差別をせず、やさしく接してくれた方がいいと思いました。みんなと共に生きていきたいなと思いました。

- ハンセン病について知れてよかった。
- この紙面を読んで思ったことは、ハンセン病の患者の方々にしても勝手に誤った認識をもつことはだめだと思いました。人権問題において決めつけるのではなくしっかりとお互いに理解を深められることが大切だと思いました。
- 中学二年生の頃に「ハンセン病」を知り少し調べるくらいだったのでよくわかっていませんでした。中学三年生になって社会の先生から「ハンセン病」のことについていろいろ学びました。この紙面を見て、特に残酷だと思ったのは、子どもを産ませないように不妊手術や堕胎が行われたことです。棚原さんがいった“多くの人権が奪われています。すべての人が自分らしく”いられるよう、身近な人権侵害から止めていきます。という言葉に賛成します。
- ハンセン病の患者は誤った認識から偏見や差別を受けていたことがわかりました。自分の名前も使えない家族にも会えないハンセン病の患者の辛さは計り知れないんだなと思いました。
- まちがった知識や国の政策などにより、多くの人の人権が奪われ、つらい、きびしい思いをしてきたということに驚きました。ハンセン病回復者の方のお話を直接聞いてみたいと思いました。
- “あん”という映画を見てみたいと思った
- らい菌の感染力は極めて弱く、感染しても発病することはほとんどないということを知りました。国の誤った政策と一般市民の認識によって、人権が侵害されたのはとてもひどいことだと思いました。うつらないのに、とじこめられるとは、どんな気持ちだったんだろう?と思います。
- 私も何らかの理由で人を差別したりした事がないか、自分を省みる機会ができました。
- 小学校6年生の時に修学旅行で愛楽園を訪れ、ハンセン病回復者のお話をきいたりすることができる機会があったんだけど、これを読んでではじめて知ったことがたくさんあって驚いた。
- ハンセン病のことがあまり知りませんでした。差別などがあったということも知りました。
- 正しい知識がない時代のハンセン病の方々の気持ちを思うと、とても悲しいです。そして療養所の入所の方が園外のことを“社会”と呼ぶと思うと、それもまた悲しいです。その時代は人権もないんだなと思いました。家族からも拒否される気持ちはされたこともないのであまりわかりませんが、人生やっていけるかどうかですね。これからも人権の守られる世の中であるといいなと思います。
- 前よりもさらに知ることができてよかった。
- ハンセン病はなにもうつすものでもないのに差別するのは間違っていると感じました。
- 自分の学校の先輩がバネリストに選ばれたのを見てすごいと思いました。ハンセン病のことを知っていたのですが、こんなにもひどい歴史があるとは初めて知りました。
- この紙面を見ての感想は3つあります。1つ目は、ハンセン病によって、人権がうばわれる必要はないと思いました。二つ目は、自分たちも、ハンセン病や人権について話しあったり、教えていき

いと思いました。三つ目は、これからは、人権をうばったり、差別したりすることをなくしていきたいと思いました。まずは自分のできることからやっていきたいです。

- ハンセン病の方々は、みんなから、差別を受けていたとき、かわいそうと思いました。ハンセン病について知ったこと・皮膚が変形することもあるそうです。・手足の神経がまひすることもあるそうです。・発病しても、適切な治療を受ければなおるそうです。
- 私はハンセン病について全然分からなかったけど、未央さんや他の沖縄の中学生がハンセン病による差別問題などのことを考えて発表できるのはとてもすごいことだなと思いました。ハンセン病の説明も簡単に書かれていて分かりやすかったし、昔沖縄にこのような差別の問題があったのはじめて知りました。この紙面を見てハンセン病の差別について知れたのもっとくわしく知りたいし、今ある差別問題のこともくわしく知りたいなと思いました。
- 「ハンセン病」という病気をこの記事ではじめて知った。この病気は別にうつる確率も低いのになんで差別なんてするんだろうと思った。この病気のこと、中学生がこんなに考えていて、自分の意見があってちゃんと発表もできていいなと思った。
- 「ハンセン病」というのは、今日初めて知り始めてきました。僕がこの「ハンセン病」で知ったことは、らい菌という細菌に感染することで起きる病気。らい菌という言葉もきいたことないのに、未央さんは、よく調べたなと思います。また、他の学校の人達もこのことについて調べていてすごいと思います。僕は、ハンセン病の事を全然知らないの、インターネットや本などでしらべたいと思います。また、絶対に差別はしてはいけないと思いました。
- ハンセン病について、社会の認識のせいで感染者の人達がひどい差別をされていたということがすごくショックでした。世界の人達にハンセン病の事を詳しく知ってもらえたらいいなと思いました。そして、自分もハンセン病の事を知って、身近な人に教えたいです。
- 最近「エイズ」の事について学んで、「差別を受けている人がいるんだな」と思いました。けれど「ハンセン病」については初めて聞いたし知りました。しかも身近にいたという事にびっくりしました。誤った知識で差別されたりさげられたりするのにはエイズだけじゃない事が分かりました。「ハンセン病」というだけで本人も家族も差別されるのはあってはならないので、みんなに正しい知識を持ってこんな事が2度と起こらないようにしてほしいです。と思いました。
- ハンセン病患者が周りから誤解されて差別にあっていたという事を始めて知りました。こういう話を知ることはあまりないと思うので知ることができて良かったです。体だけでなく、心まで傷をつけてしまう。人と人との関わり方をもう少し考えてみようと思います。またハンセン病だけでなくエイズや他の病気の方にもこういう事が大事だと思います。
- ぼくはハンセン病という言葉が今回始めて聞きました。それに、結構身近な問題だったのでびっくりしました。あと、誤った認識をされて、長い間差別をされていたのをきいてとてもかわいそうだなと思いました。
- 自分と同じ年でこんなハンセン病とかの事を考えてそれを人前で発表して自分の思いを伝える。ということはすごいと思いました。自分もちょっと見習ってちょっとはこういう事を学ばないといけないなと思いました。
- ハンセン病になった人や家族が誤った認識によって、周りから長い間差別を受けてきたのはかわいそうだなと思った。しかも国からも強制隔離を定める法律が出されて差別していたのはさらにかわいそうだ

と思った。あと、同じ中学2年生でも色々な事が書かれて、すごいと思った。なのでハンセン病患者がいてまた知識を理解して接していかないといけないなと思った。

- 最初はハンセン病が何なのかも分からなかったけど、この紙面を見て身近なこと、という事が分かったし、ハンセン病の人、家族などへの差別があるということも分かったのでいろいろ調べてみてハンセン病の知識を高め、正しい行動ができるようにしたいです。
- 「ハンセン病」という言葉はきいた事があったけれど、らい菌という細菌に感染して起こる病気だと言う事や感染力が極めて低いこともはじめて知りました。誤った認識のせいで人権が侵害された人たちがいる事も知ったので、私たちはこれを後の世代に伝えていかななくてはならないと思いました。
- ハンセン病はなんとなくきいたことがあって、この広告をよんで興味がわいた。私のまわりにハンセン病の人がいないのであまり身近なものだという意識はなかったけれど、同じ中学生が作文にとりあげていて、すごいと思った。もし、私の近くにハンセン病の人が急にきたら、うけいれきれないと思う。よく知らない病気だし、こわいと思うかもしれない。だけど、ハンセン病の作文やうつらないことを理解していれば、少しは安心して、うけいれられるかもしれない。だから、この活動を多くの人々にむけて発信してほしいと思います。
- 私はハンセン病とは何か知らなかったけど、この記事を読んで少し知ることができました。特にこのように病気があったことはあまりわからなかったので、この病気で差別されることなどを知ってびっくりしました。私もこの話を家族に話して、私達の親族にもハンセン病にかかったことのある人がいれば、色々な話を聞きたいと思いました。そして、人権を大切にしようと思改めて思いました。
- ハンセン病は感染するものと思ったけど感染しない事がこれでわかった。昔の人は自分と同じ考えもってからそれで差別したんだろうけど正直差別する理由が分からない。いや、本当にうつるかどうかわからないわけなら接触して確かめればいいし、ちゃんとした事実を確かめもせずこれはひどい。
- 私がこの紙面を見て思ったことが学べたことは、2つあります。1つめは、ハンセン病という病気があるということを知りました。でも、ハンセン病は感染がとても弱いという事が分かりました。2つ目は、ハンセン病によって長い間差別を受けてきたということを知りました。私は差別をなくしてほしいと思いました。
- ハンセン病が初めてしられたときにかかったひとは、差別されていたのはかわいそうだった。だけど、今、治療をうけたらなおるってかいてあったからかかっているひとも治せるんだなと思った。差別はいけないと思う。
- 読む前は、「ハンセン病」について、全くわからなかったけど、読んだ後「ハンセン病」について、少し、理解できました。1番印象に残ったことは、「ハンセン病」の患者や回復者、その家族が誤った認識による偏見により長い間差別を受けてきた歴史があったということです。みんなで「ハンセン病」について理解し、受け入れる事が大事なんじゃないかと思いました。
- ハンセン病という言葉はきいたことがあったけど、実際どういうものかは全く知らなかったけど、この新聞をみて知ることができた。自分はこのことについて考えたことはなかったけど、未央たちは自分の思っていることをしっかりかいていてすごいなと思った。それを、まだ知らない人達に自分達がつたえないといけないと思った。
- 最初、ハンセン病もしらなかったけど、短い文で分かりやすく簡単に書いてあって、ハンセン病がかかりされていた事などが書いてあって大変なのがめっちゃ分かった。

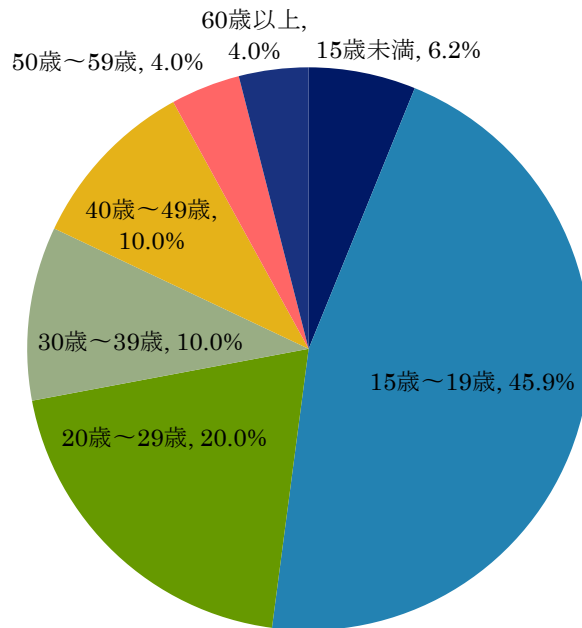
- シンポジウムでパネリストとして参加して思ったことは、自分と同じ意見を持っている人や、自分とは、違う見方をして意見をだしている人がいるので、すごく知識になりました。また、こういう機会はあるかないことなので参加してよかったと思いました。
- ハンセン病という言葉はきいたことがあったけど、ちゃんとどんな感じの病気かがしらなかったけれど、この記事を読んで手足の指先が麻痺したり、皮膚が変形したりする事があるという事を初めて知ったし、だからといって、この病気は感染力は弱くて感染しても発病することはほとんどないという事も初めて知りました。昔はハンセン病患者の強制隔離もあると知って、ダメだなあと思いました。でも、昔そうゆう事があったのは、しょうがないんじゃないかなあとと思うけど、差別したりするのはダメだと思うので、昔から差別しているから、いいさあではなくて、これから、どんどん学んでいったらいいと思います。こよう事が知れてよかったです。
- 私がこの紙面を読んで思ったことは、ハンセン病は感染力が弱いのに、その家族などが長い間差別を受けるなんてひどいなと思いました。しかも、ハンセン病の回復者まで差別を受けるのは、おどろきました。私はこれから親族がハンセン病になったとしても、差別などせずに大切にしていきたいです。
- ハンセン病を誤った認識による偏見により、差別を受けてきたそうなのでちゃんとハンセン病について知り差別をなくしたい思った。
- 紙面をみてみて思ったことは、今でも差別、偏見されている人達がいるということ。それもなくそうとがんばっているからこよう人はすごいなとおもった。
- ハンセン病は感染力が弱いのに差別されたりして、とてもかわいそうだなあと思いました。そのため、差別をなくしたりするボランティアや受け入れる社会をつかっていこうという気持ちをもって行動するのはいいことだなと思いました。
- ハンセン病は、かかりにくいけど、かかると神経が麻痺したりするから、この病気をなくしていきたいです。最初は、なになのかしらなかつたけど、この新聞を読んで、ハンセン病のことについてもっと関心をもっていきたいです。
- ハンセン病の事についてさらに興味がわきました。機会があったら参加してみたいと思う。
- かんせんしにくいのにさべつをうけてきた人がかわいそうだと思った。おなじどうきゅうせいがでてるのすごいと思った。
- ハンセン病は感染力が弱いということを知りました。差別されてかくりされたということも知った。

◆ ◇ ◆ ◇ 効果測定 インターネット調査（参考） ◇ ◆ ◇ ◆

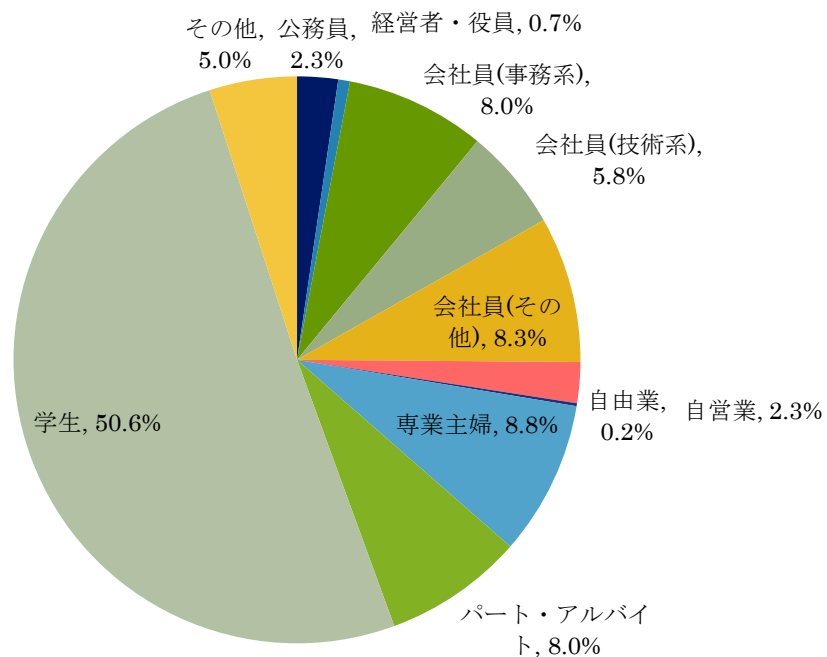
- 調査対象： 10歳代から60歳以上の男女・計601名
- 調査日： 平成29（2017）年9月中旬

【回答者の属性】

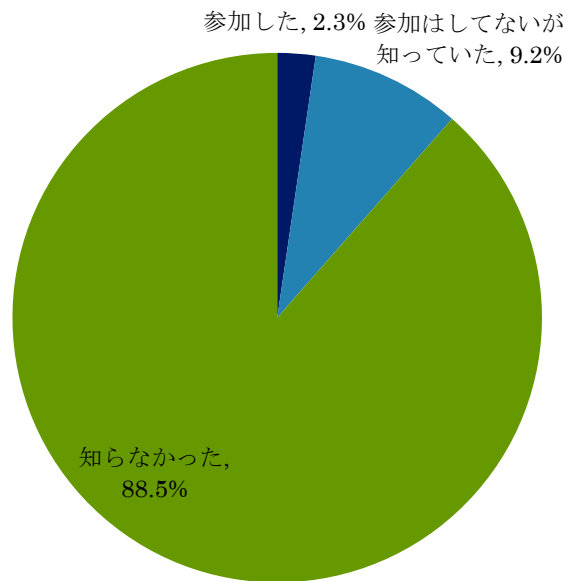
○年齢



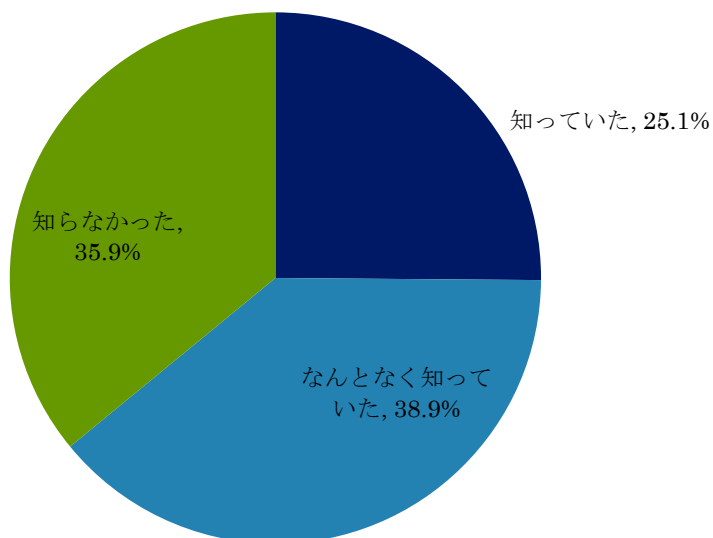
○職業



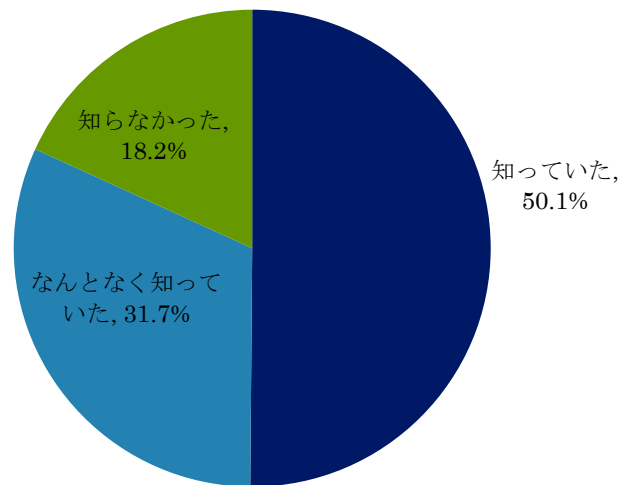
【Q1】あなたは、今年8月26日（土）沖縄県男女共同参画センター・ていするで「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』」が開催されたことをご存じでしたか？あてはまるもの一つお選びください。



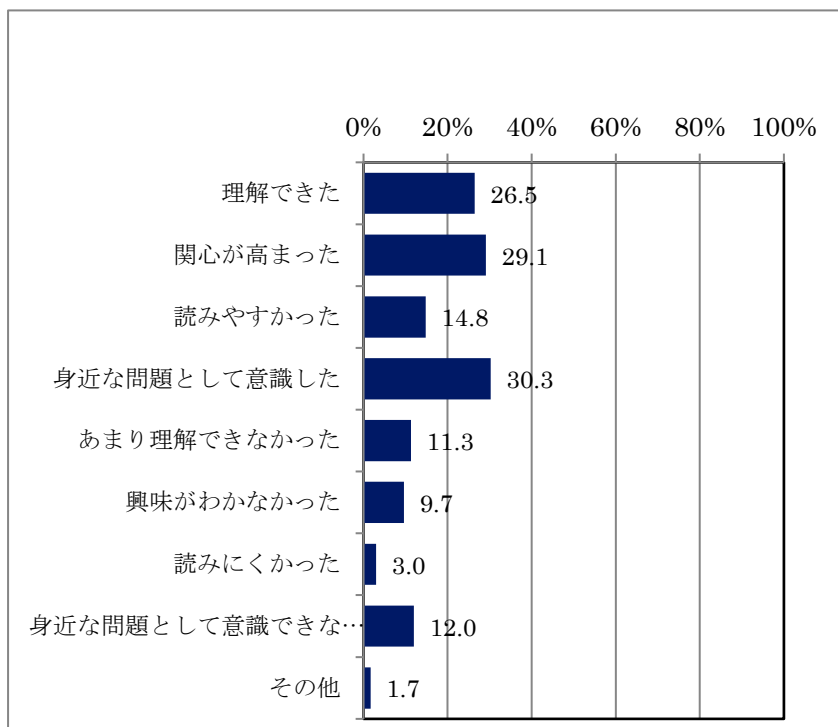
【Q2】あなたは、この紙面を見る前に、「ハンセン病」をご存知でしたか？あてはまるもの一つお選びください。



【Q3】2の質問で、「知っていた」と答えた方に質問します。あなたはハンセン病患者が隔離政策をとられ、全国各地の療養所に長年にわたり収容されていたことをご存知でしたか？あてはまるもの一つお選びください。



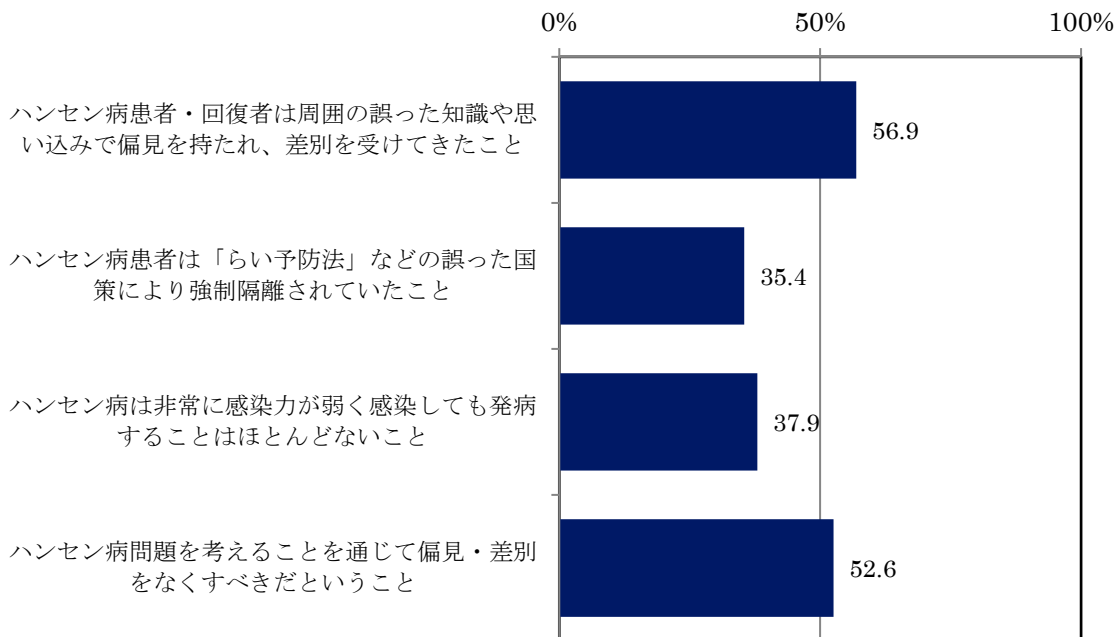
【Q4】あなたは、この紙面（記事・広報）をご覧になって、どのような印象をお持ちになりましたか。あてはまるものすべてお選びください。



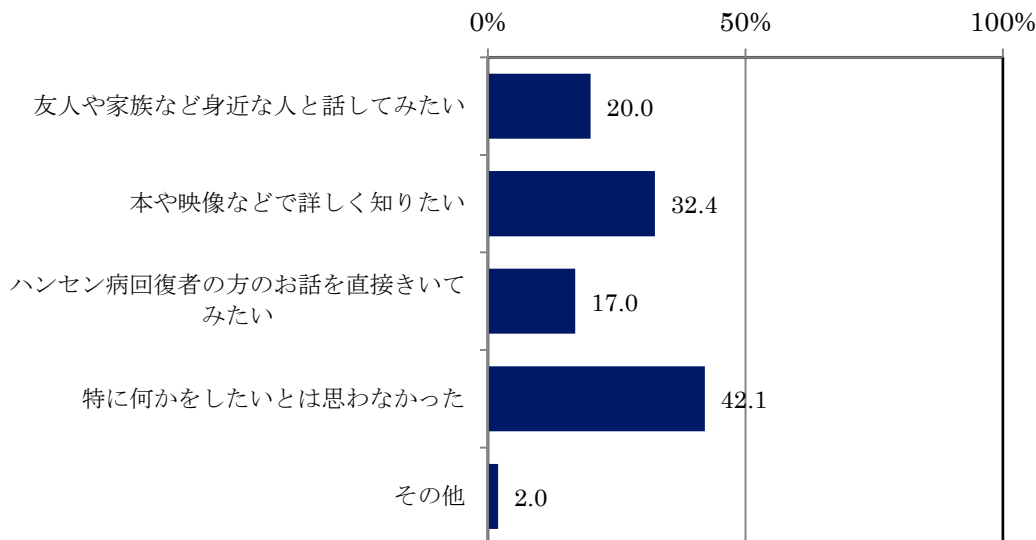
その他（自由回答）

- ・50歳～59歳 社会的背景を解説していないためそのように至った理由がさっぱりわからない。
- ・15歳～19歳 もう過去のことなのにこんなふうになるのがよく分からなかった。
- ・15歳～19歳 より知ろうと思った

【Q5】あなたが、この紙面をご覧になって理解できた事項はどれですか。あてはまるものすべてお選びください。



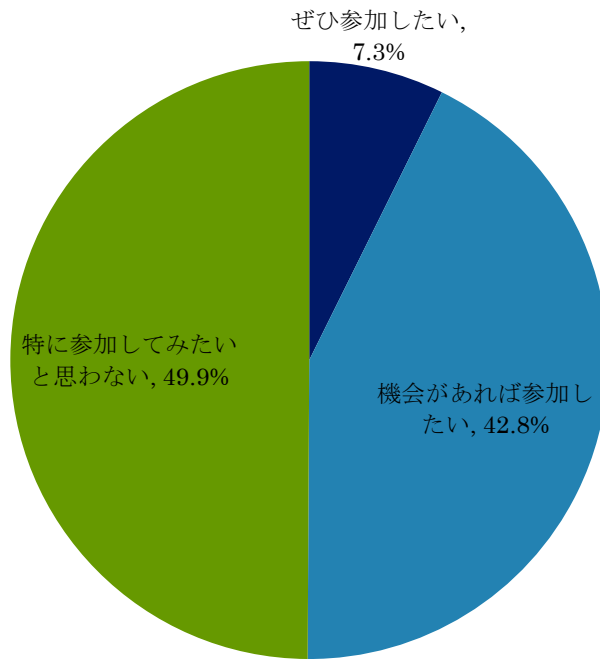
【Q6】この記事をご覧になって、何か行動を起こしたいと思いましたか？あてはまるものすべてお選びください。



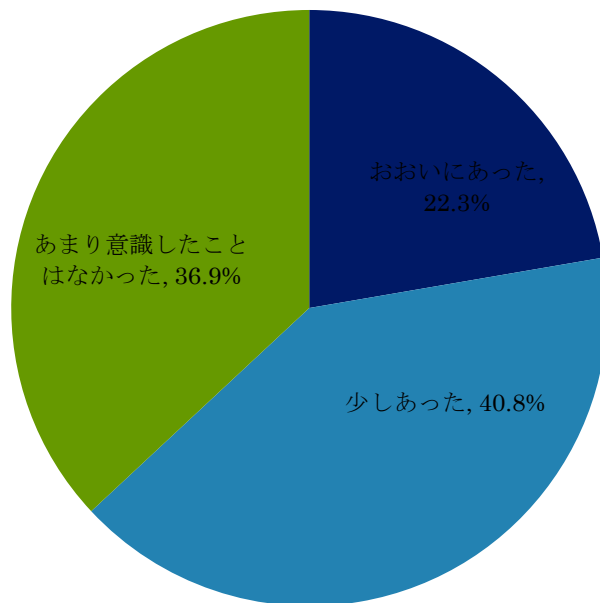
その他（自由回答）

- ・60歳以上 以前から明石海人顕彰会の会員であるので
- ・15歳～19歳 ハンセン病はどのような経緯で感染するのか、また治療法を見つけたのが誰なのか知りたい。
- ・15歳～19歳 理解を深めたい
- ・20歳～29歳 交流し、直接話を聞いたことがあるので、現段階では何もない
- ・30歳～39歳 記事が表示されていないのでわからない。
- ・15歳～19歳 ハンセン病についてもっと詳しく調べたいと思った。

【Q7】あなたは、今後ハンセン病シンポジウムが開催されたら参加したいと思いますか？



【Q8】あなたは、この紙面（記事・広告）をご覧になる前に、人権問題についてどのくらい関心や理解がありましたか



■自由回答（インターネット調査）

GEN：年齢	Q9：この記事をご覧になった感想をご自由にお書きください。ご意見・ご感想
6：50歳～59歳	good
7：60歳以上	病気に対する誤った知識が悲劇を起こす
4：30歳～39歳	知らなかったことが多い。いざ自分がそのような人たちと接したときに相手を傷つけたりしないように、しっかり勉強したいと思った
5：40歳～49歳	誤解をなくするのに有効に思える
6：50歳～59歳	歴史に翻弄
5：40歳～49歳	ありません
6：50歳～59歳	へんけんのこわさ
4：30歳～39歳	理解を深めたいと思った
6：50歳～59歳	近くでイベントがあったら参加したい
5：40歳～49歳	差別や偏見のない世の中が来る日を願う
5：40歳～49歳	差別はハンセンだけではなく
5：40歳～49歳	必要なことだとは思
5：40歳～49歳	ハンセン病は聞いたことがある程度で詳しいことはわからなかった。記事を読んで、少しでも偏見を持たないようにしてあげたい。
7：60歳以上	元々明石海人（ハンセン病の歌人）を通じてほぼ記事内容は承知していた。
5：40歳～49歳	差別を受けてきた人たちが気の毒に思った。
7：60歳以上	ハンセン病の扱いは、今になれば不当であったことが分かったが、有史以来それが標準だった。医学・科学の進展による誤りの是正がさらに重要だと思う。
5：40歳～49歳	興味がない
7：60歳以上	瀬戸内海の島に隔離施設があったので、いろいろ聞く。
7：60歳以上	差別、格差がない日本にしていかなければならない。
6：50歳～59歳	差別問題全般に言えることだが、当時の社会的背景や当時の人たちがどのように考えていたのかという考察を飛ばして、ただ「差別はいかん」とだけ言っていることが多い。当時の人達も何某かの考えでもってそのように至ったのであろうし、そこを知ることこそが重要なのではなからうか。
6：50歳～59歳	良かった
3：20歳～29歳	ハンセン病で差別や偏見をもってはいけいかな、と感じ、周りにも理解を深めたいと思った
3：20歳～29歳	昔のことに感じていたが今まだこのようなことがあるのかと感じた
7：60歳以上	無知の怖さを思い知らされた、今でも福島の子供に放射能画うつるなどという誤解がまかり通る人間の愚かさの象徴。
7：60歳以上	わからない
7：60歳以上	40年前に映画「砂の器」を見て以来、ずっと心に残っていた問題でしたので、これからも関心をもって見守って行きたいと思っています。
3：20歳～29歳	特にない
4：30歳～39歳	反省する部分がおおい
6：50歳～59歳	医学が遅れていた為の偏見と差別
7：60歳以上	ハンセン病患者に天皇陛下が直接お会いになったことが衝撃的だった。
4：30歳～39歳	ハンセン病のように本当に苦しんでいる方がいる一方、人権問題に群がるクズが多すぎるのが残念でならない
4：30歳～39歳	まだハンセン病の問題が日本にあるとは知らなかった。

5: 40歳～49歳	もっと事実を知りたくなった。
5: 40歳～49歳	理不尽だ
5: 40歳～49歳	ハンセン病は偏見に基づいて扱われてきたと思うが人権の名の下に他の病気や障害について本当に必要な対応が取られていないと感じることが多い。人権は病気や障害のある人間だけにあるのではない。今は逆差別の方が深刻だと思う。ハンセン病への取組が拡大解釈されないことを願うばかり。
7: 60歳以上	興味がなかった
2: 15歳～19歳	情報が少ない
4: 30歳～39歳	辛い
5: 40歳～49歳	んー。看護師だからなあ。そんなこと言ったら他の疾患で言われない差別を今も受けている人たちがいるから、キリがないよ。
5: 40歳～49歳	考えることが増えました
1: 15歳未満	ハンセン病のことをよく知るきっかけになりました
1: 15歳未満	ハンセン病についてもう少し知りたいと思った
6: 50歳～59歳	事実と違うことを知らずに過ごしてきたことを、残念に思う
4: 30歳～39歳	病気によって周囲の誤解や理解されないという問題が今後無くなっていったらいいなと思った
4: 30歳～39歳	知識がなく、噂や間違った情報が拡散してしまうのは怖い。
7: 60歳以上	過去に限らずどの時代においても人間の偏見はあるだろうが、国としての策が率先して偏見を導いた歴史は恐ろしく今後同様なことが起こらないという保証はない。
3: 20歳～29歳	ハンセン病の方々は辛い思いをしていて同情した
5: 40歳～49歳	病気を抱えた人のことを考えて、政府が動くべき
5: 40歳～49歳	ハンセン病は差別の歴史だったというのは、テレビなどでみたことがあり、関心はありましたが、今回の読み、更に興味を持ちました
7: 60歳以上	良く知ることができて、理解が出来ました。
6: 50歳～59歳	差別が多すぎて何とかしたい
5: 40歳～49歳	心が痛む
5: 40歳～49歳	ハンセン病に限らず中高年以上は誤った教育を受けている可能性が高いので、新しい情報をどんどん公開して皆の常識や意識を変えていく必要がある
5: 40歳～49歳	貴重な記事だと思います。
3: 20歳～29歳	特にない
2: 15歳～19歳	ハンセン病の正しい知識を広めていくことが大切だと思った。
3: 20歳～29歳	興味が無い
4: 30歳～39歳	名前位は聞いたことがあったが、改めてハンセン病のことを知ることが出来ました。
6: 50歳～59歳	間違った認識が人の一生を変えてしまう怖さを知った。
5: 40歳～49歳	間違ったことは怖い
4: 30歳～39歳	わかりやすかった
5: 40歳～49歳	長期間、持病がある人に援助してほしい
3: 20歳～29歳	他人事、昔の話と思わずこれは現代に通じることであり、今実際にある偏見や差別に対しての代表的な問題として自分自身もこの世の中も、もっと身近に真剣に考えていくべきであると思う。
7: 60歳以上	差別（部落問題を含めて）の撲滅
2: 15歳～19歳	よかった
3: 20歳～29歳	学校や地域の講演会で広めてほしい
7: 60歳以上	改めて認識した
3: 20歳～29歳	無知が生む偏見や差別ほど理不尽なことはない。

2: 15歳～19歳	わからない
5: 40歳～49歳	隔離され人権侵害を受けて生きなければいけなかった時間を取り返すことは出来ないので、国がきちんと保障してあげてほしいと思いました。
3: 20歳～29歳	偏見の原因は知識不足
3: 20歳～29歳	ハンセン病について、正しい理解を深めたいと感じました。
2: 15歳～19歳	関心が高まった
2: 15歳～19歳	将来医療従事者になるので風化させてはいけない医療の現実や歴史をもっと知らなければいけないと感じた
4: 30歳～39歳	ハンセン病について考えるきっかけになった
2: 15歳～19歳	語り継いでいくべきだと思った
2: 15歳～19歳	頭ではわかっていても差別が起こっている現状とわかりました
2: 15歳～19歳	人権について興味があるので深く調べたいと思いました。
2: 15歳～19歳	日本国内だけでなく、病気や人種国籍性別などによる差別問題や国際問題についてとても興味があったので、とてもいい機会になりました。もっと積極的に若いうちに行動に移したいと思います。
1: 15歳未満	このようなことをテーマにアンケートを行うのもとてもいい
3: 20歳～29歳	こんな人があるんやと思った
2: 15歳～19歳	偏見や差別は絶対に無くすべき
5: 40歳～49歳	良かった
3: 20歳～29歳	特になし
2: 15歳～19歳	私の大学は医療系なので授業内でハンセン病のことについて学んでいました。このような事があったという事実を忘れてはいけないと思うので、多くの人に知ってもらいたいと思いました。
2: 15歳～19歳	特になし
4: 30歳～39歳	興味なし
2: 15歳～19歳	ハンセン病という新しい病気を知ることができてためになった
3: 20歳～29歳	知ることで伝えられることを知った。
3: 20歳～29歳	自分自身、人権というものへの関心が高まったとともに、知らないこともあったので、今後さらに理解を深めていきたいと思った
2: 15歳～19歳	何が言いたいのがよく分からなかった。
4: 30歳～39歳	いい感じや
3: 20歳～29歳	つらい
4: 30歳～39歳	知らないことを知れて良かった
3: 20歳～29歳	ハンセン病に苦しむ人がいることを初めて知りました。
3: 20歳～29歳	勉強になりました
3: 20歳～29歳	医学部なので、関心を持って読めた。
5: 40歳～49歳	過去に縛られすぎ
2: 15歳～19歳	ハンセン病についてよくわかった
2: 15歳～19歳	よくわからん
2: 15歳～19歳	その病気になったことによる、差別がもうおこらないように予防をちゃんと知ろうと思った
2: 15歳～19歳	差別などによって辛い思いをする人を少しでも減らしたいと思った。
2: 15歳～19歳	たくさんの方が苦しんでいることが分かった。
2: 15歳～19歳	ハンセン病は昔の話だと思っていたがいまもあるのかと知った
2: 15歳～19歳	風化させるのは、ダメだと感じた
2: 15歳～19歳	病気のことを知りもしないで偏見や差別をするのはいけないと思った
3: 20歳～29歳	自分の知らない事がまだまだあると感じた

3: 20歳～29歳	人権問題として、幅広く理解を広める必要があると感じた。
4: 30歳～39歳	昔の事と思わず、今も続いている問題として私たちがもっと関心を持ち、こんな酷い事が2度と行われないうちしなければならぬと思いました。
2: 15歳～19歳	人権について改めて考えるようになった
3: 20歳～29歳	ハンセン病や結核 HIV など正しい知識をもち、今後も研究を進めていってほしい
3: 20歳～29歳	癩病についてはよく学校で学んでいたのですがこの記事からより一層知ることができた
2: 15歳～19歳	人権問題の学校での学習に役立つ
4: 30歳～39歳	過去の誤った解釈で差別をされていた人がいるのは事実だが、自分が何かしようとは思わない
2: 15歳～19歳	よくない
2: 15歳～19歳	名前ぐらいしか知らなかったが、改めてきちんと調べて、知ることは大事だなと思った
1: 15歳未満	ハンセン病がレISHAM病になれはいいのに
2: 15歳～19歳	学校で習いました、
3: 20歳～29歳	学生時代にハンセン病患者が感染するという理由で隔離されていた話を本で読んだことを思い出しました。今でも裁判判決等のニュースで見ますが、今でも苦しんでいる人がいることを改めて認識できたと思います。
7: 60歳以上	世間にもっと理解してもらえようもっと知ってもらい必要がある
4: 30歳～39歳	偏見を持つてはいけないが、身近に居たら普通に接することができるかわからない
2: 15歳～19歳	人権についてもっと考えていきたい
2: 15歳～19歳	家の近くにハンセン病の病棟があるので興味はあったがよくわかることができた
3: 20歳～29歳	人権差別反対
2: 15歳～19歳	差別、偏見が少しずつでもなくなればよいと思った
2: 15歳～19歳	非常にためになった。
4: 30歳～39歳	理解していきたい
2: 15歳～19歳	差別は良くない
3: 20歳～29歳	忘れかけている病気のこと、隔離や差別を受けてきた人がいるという事実を客観的に、深く気付けた
2: 15歳～19歳	特にない
5: 40歳～49歳	ハンセン病患者の人は、想像出来ないくらい辛い思いをされたと思うと心痛みました。
2: 15歳～19歳	これからも人権についてしっかり考えていきたい。
2: 15歳～19歳	ハンセン病についてよく分かった
2: 15歳～19歳	難しい問題だと思う
2: 15歳～19歳	ハンセン病を知らなかった。そんなものがあると初めて知った。
5: 40歳～49歳	世間一般の偏見で辛い思いをしている方の気持ちを思うと、もっと詳しい発信を世の中にするべきだと思った。
2: 15歳～19歳	病気も人権に関わることものでこれからもしっかりと関わってきたい。
3: 20歳～29歳	ハンセン病は古い昔の話と聞いていたが、今もハンセン病で苦しんでいる人もいて、悲しい過去について理解したいと思った。
3: 20歳～29歳	ハンセン病をはじめ人権問題に関わる事柄について普段全く意識していないが、今現在でも苦しんでいる人々が大量にいるかもしれない少しでも寄り添う心を持っていきたいと思った。
3: 20歳～29歳	詳しくは知らなかったで勉強になりました。まずはきちんと知ることが大切だと思います。
3: 20歳～29歳	身近にいないので意識したことはなかったが、出会ったりした時は普通に接しようと思った
2: 15歳～19歳	特にない

4: 30歳～39歳	医療関係者のため、ハンセン病の歴史は知っていた。歴史のひとつとして、学校などで広く学んでも良いのではないのかと思う
2: 15歳～19歳	みてない
2: 15歳～19歳	しるか
2: 15歳～19歳	唐突にハンセン病何て言われてもはつきり分からないし、難しい話だと思った。
4: 30歳～39歳	病気に対して正しい理解が必要
5: 40歳～49歳	全然知らなかったこれを期に色々考えようと思った
1: 15歳未満	病気で悩んでいる人がいても、世の中の人は関係ないと思っている人が多い
2: 15歳～19歳	よくわからなかった
3: 20歳～29歳	理解しやすい記事でした。
3: 20歳～29歳	たくさんの人にハンセン病のことを知って欲しいと思った。
3: 20歳～29歳	有名な病名ばかりが目立つと認知度の低い病気が放置されないか心配。
2: 15歳～19歳	とても興味があります。もっと詳しく知りたいと思う
3: 20歳～29歳	こんな恐ろしいことが行われていたなんて知らなかった
2: 15歳～19歳	特にない
1: 15歳未満	知らなかったから知れて良かった。
1: 15歳未満	イベントが開催されていたのは知らなかった
3: 20歳～29歳	特にない
4: 30歳～39歳	あまり聴きたくなかった
4: 30歳～39歳	知る事は大事な事だと思いました。
3: 20歳～29歳	久しぶりにハンセン病の事について知る機会が出来てよかった
2: 15歳～19歳	ハンセン病について考えることは今までなかったもので、新たな知識を得ることができそれについて考えるきっかけとなった
2: 15歳～19歳	ハンセン病は、治る病気にも関わらず世間からは、差別や偏見を受けてきました。でも、ハンセン病は、治る病気で感染力も極めて低いことを知って欲しかったです。
3: 20歳～29歳	人権問題に興味を持つきっかけになった
4: 30歳～39歳	名前だけは知っていた病気であったが、理解が深まった
5: 40歳～49歳	偏見を持たないように詳しく知ることから始めなければならぬ
2: 15歳～19歳	ハンセン病のことを知ることが出来ました
5: 40歳～49歳	何事も関心をもつことは大事である
2: 15歳～19歳	ニュースで見ている以上に 考えさせられることだと思います
2: 15歳～19歳	誤った知識や認識で人の権利を侵害する行為も勿論のこと、私たち自身がそれを助長しかねなく、あってはならないと思った。
2: 15歳～19歳	日頃なかなか触れることのない記事であったので、改めていろいろ考えさせられた。
2: 15歳～19歳	悲しい
2: 15歳～19歳	今も苦しんでいる人がいることを知った
3: 20歳～29歳	無知は罪だと思う
2: 15歳～19歳	あーハンセン病かー
4: 30歳～39歳	このような差別に苦しめられていた事実を、国は教育としてちゃんと子供に伝える義務がある。
1: 15歳未満	良かったと思います。
2: 15歳～19歳	特にない
2: 15歳～19歳	あまり知らない病気なのでより理解したいと思った。
3: 20歳～29歳	もっと病気について知ろうと思いました。
2: 15歳～19歳	偏見は良くない

2: 15歳～19歳	あまり興味がなかった。
2: 15歳～19歳	ハンセン病患者さんの隔離される施設がある地元なので割と知識はあったが、よりいっそう知りたいと思うようになった。
2: 15歳～19歳	もう少し詳しく教えて欲しかった
2: 15歳～19歳	ためになった。
1: 15歳未満	もっと調べようと思った
2: 15歳～19歳	ハンセン病について改めて考えるきっかけになりました。
2: 15歳～19歳	未だに差別があるのはなくしたいと思った
2: 15歳～19歳	ハンセン病については元々詳しく学校で説明されたため知っていました。
2: 15歳～19歳	知らないことも知れてよかったです。
2: 15歳～19歳	特にない
2: 15歳～19歳	積極的に活動してほしい
2: 15歳～19歳	まはまらなさばやらみはまはたまきあさなゆけならや
2: 15歳～19歳	記事を見るまではこの病気について知らなかった。記事を見て知らないことをたくさん知れたのでもっと知って理解していきたいと思った。
2: 15歳～19歳	様々な人権問題がある中で、特別ハンセン病に関することに興味を持つということは無かったです。
2: 15歳～19歳	あまり知らないことだったので、驚くことが多かった
2: 15歳～19歳	エイズなども隔離されていたので、しっかりとした知識が必要だと思った
2: 15歳～19歳	大変だと思った
2: 15歳～19歳	すごい勉強になった。これからどんどんこの知識を活かしていきたい。
2: 15歳～19歳	もっとこの病気についての正しい知識が広められるべき
1: 15歳未満	ふつう
3: 20歳～29歳	人権に関する話題はいつの時代も尽きることがない問題であり、自分自身もしっかり向き合うべきだと感じた。
2: 15歳～19歳	記事を見て、ハンセン病とゆうものなのか、詳しく知りました。よく知らなかった分、理解も多く出来て、これから本屋とかで詳しく調べてみたいと思ったし、自分に出来ることはないか考えようと思った。
3: 20歳～29歳	むずかしい
2: 15歳～19歳	人権は大切にすべきだと思った
2: 15歳～19歳	うん
2: 15歳～19歳	差別や偏見は本当に良くないです…
3: 20歳～29歳	自分かもし病気とかになった時差別を受けたりすることがないとはいきれないし、病気の人にもなりたくてなってる訳じゃないから、もっとお互いのことを考えて理解し合える国になってほしいと思った
2: 15歳～19歳	偏見で人を傷つける
4: 30歳～39歳	記事を見ない限り、日常でハンセン病について考える機会がなかったのでよい体験になりました
2: 15歳～19歳	ハンセン病の怖さについても知れた
1: 15歳未満	ハンセン病はどういうところで感染するのか
3: 20歳～29歳	差別や人権を無視するようなことは決してあってはならないと改めて考えた
3: 20歳～29歳	日頃意識していないことだったので勉強になった。
3: 20歳～29歳	偏見を持ったままでは何も変わらないので学ぶ姿勢が大事だと思う。
2: 15歳～19歳	ハンセン病という病気を初めて知った。
2: 15歳～19歳	大変だと思った

5: 40歳～49歳	あまり周りになく、身近に感じられない。
2: 15歳～19歳	自分の知らないことを知れてよかった
2: 15歳～19歳	今だに間違えた思い込みでハンセン病患者が苦しんでいると思うとても胸が痛いです。私自体、ハンセン病のことを知ったのは最近ですが、正しい知識を身に付けたいと思いました。
6: 50歳～59歳	こんな事あるなんて知らなかった
2: 15歳～19歳	今までの人権学習より詳しくかった
2: 15歳～19歳	周りの人はあまり関心興味がなく、もはや知らないという人が多いので、こうやって多くの人が見るネットなどでハンセン病はどのような病気かなどを発信していくのはとてもいい事だと思った
2: 15歳～19歳	特にない
2: 15歳～19歳	特にない
3: 20歳～29歳	解決すべき問題だと思う
3: 20歳～29歳	完全に差別がなくなるのは難しいと感じた
3: 20歳～29歳	無知が偏見を生むと思いました
4: 30歳～39歳	今でも差別を受け続けている人がいることを忘れてはいけないし、差別がなくなると良いと心から思います。
2: 15歳～19歳	丁寧だった
4: 30歳～39歳	あまりよく覚えていない
1: 15歳未満	ハンセン病の実態を知ることが出来た。見やすい記事だった
2: 15歳～19歳	勉強になった
2: 15歳～19歳	日本においてハンセン病で差別されていた人がいると思うと、胸が痛んだ。
1: 15歳未満	もっと多くの人に知られたらいいと思う
2: 15歳～19歳	知れる機会がありがたいこと
2: 15歳～19歳	ハンセン病は怖くない
2: 15歳～19歳	ハンセン病について知るきっかけとなりました
2: 15歳～19歳	とてもいい
2: 15歳～19歳	他にも差別や偏見を持たれている事柄について今後知りたい
2: 15歳～19歳	あまりわからなかった
3: 20歳～29歳	少しの考えの違いが差別につながるのでよく考える必要があると考えた
2: 15歳～19歳	ハンセン病についてもっと調べていきたいと思いました。
2: 15歳～19歳	自分の知らない世界は広いと思った
1: 15歳未満	苦しんでいる方々がすこしでも楽になるようなことを目指していけたらいいと思う
2: 15歳～19歳	ハンセン病は学校の保健の授業で習ったことがあったのでより改めて知らないといけない知識だなど思うことができた。
2: 15歳～19歳	過去のことと思わず向き合う必要がある
1: 15歳未満	ハンセン病は意外にも身近なんだと思いました
4: 30歳～39歳	自分の身近にない事には、知らないことがたくさんあると改めて気づきました。発信していただくことで知ることが出来ることはありがたい。理解を深めることで傷つく人が少しでも減つたらいいと思う。
3: 20歳～29歳	学校の授業で聞いたことがある内容だが、大人になってからはあまり目にする事がなかった。風化させてはいけない問題だと思った。
5: 40歳～49歳	正しい情報が重要だと感じた。
4: 30歳～39歳	病気のことがわかって、中々協力することができない。
4: 30歳～39歳	とても辛い暗い歴史であるが、目を背けてはいけない社会問題であると感じた。
2: 15歳～19歳	人にとって見た目というのはなかなか大きな影響を及ぼすことがわかった。
1: 15歳未満	差別されていたのがかわいそうだと思いました。

2: 15歳～19歳	私の知らないところでは過去も今も差別に苦しむ人がいるんだろう、と改めて感じさせられた。
3: 20歳～29歳	みんな知るべきだ
2: 15歳～19歳	少し興味がわいた
2: 15歳～19歳	しっかり理解して差別はしてはいけないと思いました
2: 15歳～19歳	隔離する必要はなかったのではないかなと思う
2: 15歳～19歳	特にない
2: 15歳～19歳	人権とかは、難しくとつきにくい。
2: 15歳～19歳	映画あんを見てハンセン病を知ったこの記事を見てより理解出来た
2: 15歳～19歳	微妙
3: 20歳～29歳	ハンセン病だということで、人間として生活できなかった人がいるのは悲しい現実だと思う。
3: 20歳～29歳	もっと勉強するべきだと思った
1: 15歳未満	自分があったとこがないため、あまり実感は湧かないでも、病気の人が苦しんでる上に差別されるのは最もいけないと思う
6: 50歳～59歳	いい知識が身についた
2: 15歳～19歳	学校で習った
6: 50歳～59歳	涙
2: 15歳～19歳	読みやすかった
2: 15歳～19歳	新たなことを知れました
2: 15歳～19歳	難しい話でよくわからなかった。
2: 15歳～19歳	ありがとうございます
1: 15歳未満	とてもわかりやすく、関心を持った
1: 15歳未満	少し難しい
2: 15歳～19歳	よかった
2: 15歳～19歳	ハンセン病について知ることができた。
2: 15歳～19歳	身近に認識していく事としてこういった活動で少しずつでも認識されていくことはとても大切なので活動を続けて行ってほしいです。
2: 15歳～19歳	特にない
3: 20歳～29歳	よかった
2: 15歳～19歳	病気による誤った偏見はどうかしなくてはならない
3: 20歳～29歳	メディア等の偏った意見に左右されず、自分で正確な情報を知る努力をすべきと思った。
2: 15歳～19歳	私の知識はとても浅いものだったのだと、改めて感じました。
2: 15歳～19歳	あまり関心が持てなかった
3: 20歳～29歳	この病気に対し、もっと知識を高め、周りにもどういものかきちんと知らせる必要があると思った。良い機会になった。
2: 15歳～19歳	ハンセン病による差別は無くすべきだと思う
2: 15歳～19歳	難しかったです。
2: 15歳～19歳	差別を無くしたい
1: 15歳未満	世の中には、たくさんの病気があるんだなー
2: 15歳～19歳	特にない
1: 15歳未満	知らなかった
2: 15歳～19歳	ハンセン病について知ることができた
2: 15歳～19歳	もっとたくさんの方が関心を寄せるべきことだと思った。
1: 15歳未満	身近な問題として考えていこうと思う
1: 15歳未満	差別はダメ

2：15歳～19歳	身近に感じた。
2：15歳～19歳	それらが本体に最まであったと知った
2：15歳～19歳	病気による差別がなくなるいいなと思う
2：15歳～19歳	ハンセン病は怖い病気だと思った
1：15歳未満	初めて知ったことが多かった
1：15歳未満	ハンセン病で差別を受けた人達が今どう暮らしているのか興味が湧いた
2：15歳～19歳	理解できた
2：15歳～19歳	ハンセン病はこわい
2：15歳～19歳	ハンセン病という名前だけは知っていたが、実際どんなものなのかを今回詳しく知れたので良かったです。
2：15歳～19歳	差別をなくしたい

[YouTube での人権啓発関連映像の配信について]

「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』那覇会場」の様子は、動画共有サイト YouTube の「人権チャンネル」において視聴可能です。



ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」那覇会場



人権啓発窓口広報用コンテンツ「子どもの人権110番」

また、YouTube の「法務省チャンネル」では、ハンセン病問題をはじめ、人権について理解を深めていただくための映像を公開しています。



人権アーカイブシリーズ

「ハンセン病問題～過去からの証言、未来への提言～」

家族で考えるハンセン病」



私たちが支援する人は
いなかった。

人権啓発ビデオ「あなたがあなたらしく生きるために
性的マイノリティと人権」

[人権ライブラリーの御案内]



人権ライブラリーでは、およそ 15,000 冊の国内外の人権関連図書をはじめ、映像資料 (DVD、VHS)、紙芝居、展示用パネル、全国の地方公共団体が発行する啓発資料などを所蔵し、閲覧・貸出を行っています。これらの啓発資料は、郵送等による貸出を行っており、遠方の方もご利用いただけます。

人権チャンネル

検索



<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

〒105-0012

東京都港区芝大門 2-10-12 KDX 芝大門ビル 4F

TEL 03-5777-1919 / FAX 03-5777-1954

Eメール library@jinken.or.jp

※ 公益財団法人 人権教育啓発推進センター・併設

◆ ◇ ◆ ◇ これまでの実績 ◇ ◆ ◇ ◆

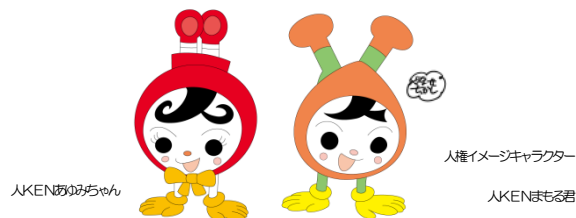
1. 法務省：ハンセン病に関する「親と子のシンポジウム」 ※平成17(2005)年度～

年度	開催日	開催地	備考(療養所)
平成17(2005)	2005.08.28(日)	福岡県	※療養所外
	2005.08.31(水)	東京都	国立多磨全生園
平成18(2006)	2006.07.26(水)	青森県	国立松丘保養園
平成19(2007)	2007.07.31(火)	鹿児島	国立星塚敬愛園/国立奄美和光園
平成20(2008)	2008.07.27(日)	岡山県	国立長島愛生園/国立邑久光明園
	2008.08.04(月)	群馬県	国立栗生楽泉園
平成21(2009)	2009.08.22(土)	香川県	国立大島青松園
	2009.08.30(日)	沖縄県	国立沖縄愛楽園/国立宮古南静園
平成22(2010)	2010.08.21(土)	宮城県	国立東北新生園
	2010.08.28(土)	静岡県	国立駿河療養所/私立神山復生病院
平成23(2011)	2011.09.23(金)	熊本県	国立菊池恵楓園/私立待労院診療所
平成24(2012)	2012.07.31(火)	青森県	国立松丘保養園
平成25(2013)	2013.07.24(水)	東京都	国立多磨全生園
平成26(2014)	2014.07.26(土)	岡山県岡山市	国立長島愛生園/国立邑久光明園
平成27(2015)	2015.07.20(祝)	鹿児島県鹿児島市	国立星塚敬愛園/国立奄美和光園
平成28(2016)	2016.07.21(木)	香川県高松市	国立大島青松園
平成29(2017)	2017.08.26(土)	沖縄県那覇市	国立沖縄愛楽園/国立宮古南静園

2. 厚生労働省：ハンセン病に関するシンポジウム ※平成16(2004)年度～

年度	回数	開催日	開催地	備考(療養所)
平成16(2004)	第1回	2005.03.14(月)	東京都	国立多磨全生園
平成17(2005)	第2回	2006.01.25(水)	愛知県	※療養所外
平成18(2006)	第3回	2006.11.07(火)	福岡県	※療養所外
	第4回	2007.01.12(金)	宮城県	国立東北新生園
平成19(2007)	第5回	2007.12.14(金)	沖縄県	国立沖縄愛楽園/国立宮古南静園
	第6回	2008.01.31(木)	北海道	※療養所外
平成20(2008)	第7回	2008.09.20(土)～ 09.21(日)	岡山県	国立長島愛生園/国立邑久光明園
平成20(2008)	第8回	2009.02.07(土)	大阪府	※療養所外
平成21(2009)	第9回	2010.02.13(土)	香川県	国立大島青松園
平成22(2010)	第10回	2011.01.15(土)	青森県	国立松丘保養園
平成23(2011)	第11回	2011.11.05(土)	静岡県	国立駿河療養所/私立神山復生病院
平成24(2012)	第12回	2013.02.09(土)	鹿児島県	国立星塚敬愛園/国立奄美和光園
平成25(2013)	第13回	2013.10.26(土)	群馬県	国立栗生楽泉園 ※台風のため中止
平成26(2014)	第14回	2015.01.31(土)	熊本県熊本市	国立菊池恵楓園
平成27(2015)	第15回	2015.11.03(火)	北海道札幌市	※療養所外
平成28(2016)	第16回	2017.02.04(土)	兵庫県神戸市	※療養所外
平成29(2017)	第17回	2018.02.03(土)	東京都渋谷区	国立多磨全生園

※ 私立待労院診療所(熊本県熊本市)は、平成27(2015)年1月10日閉院



人権イメージキャラクター人 KEN まもる君と人 KEN あゆみちゃんは、漫画家やなせたかしさんのデザインにより誕生しました。2人とも、前髪が「人」の文字、胸に「KEN」のロゴで、「人権」を表しています。人権が尊重される社会の実現に向けて、全国各地の人権啓発活動で活躍しています。

平成29年度法務省委託

「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』那覇会場」

＊ 報 告 書 ＊

公益財団法人 人権教育啓発推進センター
「ハンセン病に関する『親と子のシンポジウム』」事務局
〒105-0012 東京都港区芝大門2-10-12 KDX 芝大門ビル4F
TEL 03-5777-1802 (代表) / FAX 03-5777-1803
ウェブサイト <http://www.jinken.or.jp>

YouTube 「人権チャンネル」 <https://www.youtube.com/jinkenchannel>
YouTube 「法務省チャンネル」 <https://www.youtube.com/MOJchannel>

人権ライブラリー <http://www.jinken-library.jp>
※ 人権教育啓発推進センター併設

法務省 人権擁護局 <http://www.moj.go.jp/JINKEN/>
